概況

平成二十八年(二〇一六)の歌舞伎界

小玉祥子

歌舞伎界では二つの大襲名があり、昭和から平成の歌舞伎を担った先代の名を、子が継いだ。中村芝雀の五代目中村雀右衛門と中村橋之助の八代目中村芝翫襲名である。

襲名は共に歌舞伎座から始まった。歌舞伎座の雀右衛門襲名は三月。昼の披露演目が「鎌倉三代記　絹川村閑居」で雀右衛門の時姫、菊五郎(菊之助代役あり)の三浦之助、吉右衛門の藤三郎、秀太郎の長門。夜の披露演目が「金閣寺」で雀右衛門の雪姫、幸四郎の大膳、仁左衛門の東吉、梅玉の狩野之介、坂田藤十郎の慶寿院尼。雀右衛門は父の四代目も得意とした三姫に数えられる時姫と雪姫を格調高く見せ、力量を示した。他に昼は「曽我対面」(松緑の五郎、勘九郎の十郎、橋之助の工藤、扇雀の虎)、夜は「角力場」(橋之助の長五郎、菊之助の与五郎と放駒)などを上演。

歌舞伎座の芝翫襲名は十、十一月の二ケ月続きで、新芝翫の子の国生、宗生、宜生も同時に四代目橋之助、三代目福之助、四代目歌之助を襲名した。親子四人の同時襲名はあまり例がないという。

十月の披露演目は昼が「幡随長兵衛」で芝翫の長兵衛、菊五郎の水野、雀右衛門のお時。芝翫は親子の別れに情感をにじませた。夜が「熊谷陣屋」の熊谷直実。魁春の相模、菊之助の藤の方、吉右衛門の義経、歌六の弥陀六で、新芝翫は現在では他に演じ手のいない四世芝翫の工夫した芝翫型で演じ、成果を上げた。昼の序幕の舞踊「初帆上成駒宝船」が三兄弟の出し物。他に昼は「女暫」(七之助の巴御前)、夜は「外郎売」(松緑)、「藤娘」(玉三郎)などを上演。

十一月の披露演目は昼が芝翫の親獅子、三兄弟の仔獅子の「祝勢揃壽連獅子」で息がよく合った。夜が「盛綱陣屋」で芝翫の盛綱、秀太郎の微妙、時蔵の篝火、扇雀の早瀬、幸四郎の和田兵衛。芝翫は舞台ぶりが大きく、弟高綱への情愛が感じられた。三兄弟は夜の最後の「芝翫奴」を橋之助、歌之助、福之助の順に役替わりで踊った。他に昼は「加賀鳶」(幸四郎の道玄)、夜は「御浜御殿綱豊卿」(仁左衛門の綱豊、染五郎の助右衛門)などが上演され、「御浜御殿」が高い舞台成果を示した。

同劇場の一月は「初春大歌舞伎」。吉右衛門の「石切梶原」、玉三郎の「茨木」、幸四郎の清正、金太郎の秀頼の「二条城の清正」、鴈治郎の伊左衛門、玉三郎の夕霧の「廓文章」、染五郎の直次郎、芝雀の三千歳の「雪暮夜入谷畦道」などが上演された。

二月は「二月大歌舞伎」。昼が吉川英治原作、今井豊茂脚本・演出の「新書太閤記」の通し。菊五郎の木下藤吉郎(羽柴秀吉)、時蔵の寧子、梅玉の織田信長、吉右衛門の明智光秀の配役で「長短槍試合」から「清須会議」までの登り坂の秀吉の姿が明るく描かれた。夜が梅玉の源太、秀太郎の延寿の「源太勘当」、吉右衛門の次郎左衛門、菊之助の八ッ橋の「籠釣瓶」など。吉右衛門が「愛想づかし」をされての哀れさを見せた。

四月は「四月大歌舞伎」で幸四郎、仁左衛門、染五郎ら。幸四郎は昼の「不知火検校」の按摩富の市で殺しも辞さない悪の魅力を描き出した。仁左衛門は昼の「身替座禅」の右京で品と愛嬌を示し、夜の「毛谷村」の六助で義太夫に乗り、純な人柄を表現。夜に新作「幻想神空海」(夢枕獏原作、戸部和久脚本)。染五郎の空海が、唐に留学中に様々な怪奇現象に遭遇する。廻り舞台を用い、趣向豊かな作品だが、エピソードが分かり辛かった。

五月は「團菊祭」。菊五郎が昼夜とも一演目のみの出演で、松緑、菊之助、海老蔵が大役を

勤め、吉右衛門、梅玉が参加。昼の序幕は久々の上演となる「鵺退治」で梅玉の頼政。作品的には改良の余地がありそうだ。続く「寺子屋」は海老蔵の松王、菊之助の千代、松緑の源蔵、梅枝の戸浪の清新な一幕。「十六夜清心」は菊之助の清心、時蔵の十六夜。「楼門五三桐」は吉右衛門の五右衛門、菊五郎の久吉で大歌舞伎の味わい。夜は序幕が「勢獅子」。菊之助の長男寺嶋和史の初お目見得で、菊五郎、吉右衛門の二人の祖父が共演して寿いだ。「三人吉三」は菊之助のお嬢、松緑の和尚、海老蔵のお坊。「時今也桔梗旗揚」は松緑の光秀。「男女道成寺」は菊之助と海老蔵。五役を演じた菊之助の進境が際立った。

六月が「義経千本桜」の三部制での通し上演。一部の最初が「碇知盛」の「渡海屋」「大物浦」。染五郎初役の知盛に悲愴美があり、猿之助の典侍の局は安徳帝への思いが出た。続いて義経(梅玉)が吉野へ落ちる様子を舞踊仕立てにした「時鳥花有里」。染五郎の傀儡師が義経、静御前などの面を使い分けた。二部が「いがみの権太」。幸四郎の権太が「木の実」で小悪党ぶりと妻子への情を見せ、「すし屋」では「モドリ」で無念さを表現。染五郎の弥助に平家の公達らしい品があり、猿之助のお里が愛らしかった。三部が「狐忠信」。「吉野山」は猿之助のきびきびとした忠信と染五郎の優美な静御前。「川連法眼館」は猿之助が忠信と忠信実は源九郎狐で鮮やかな動きを示した。幕切れでは歌舞伎座新開場後初の宙乗りを披露。

七月が「七月大歌舞伎」。昼が新作歌舞伎の「柳影澤蛍火」(宇野信夫作、織田紘二補綴・演出)。海老蔵の柳沢吉保が悪の魅力を発散し、猿之助の隆光がしたたかさを出した。次が「流星」で猿之助の流星。夜が「荒川の佐吉」から。猿之助の佐吉が三下からひとかどの親分となるまでの成長を切れのいい台詞で生き生きと見せた。海老蔵の郷右衛門、中車の相模屋政五郎。続いて「歌舞伎十八番」を復活した景清物の「鎌髭」と「景清」。松岡亮脚本、藤間勘十郎演出・振付で海老蔵の景清。

八月が「八月納涼歌舞伎」。三部制で一部が「嫗山姥」から。扇雀の「しゃべり」が巧み。続く「権三と助十」は獅童の権三、染五郎の助十、七之助のおかん、巳之助の助八で好アンサンブル。二部が「東海道中膝栗毛」(戸部和久脚本、猿之助脚本・演出)。染五郎の弥次郎兵衛、猿之助の喜多八。ラスベガスの場や宙乗りがある理屈抜きの娯楽作。続く「紅翫」は橋之助が、「須磨浦」の熊谷、「先代萩」の政岡などを踊り分けた。三部の最初が「土蜘」。橋之助が智籌で不気味さを出し、後シテの土蜘の精に迫力があった。続いて新作「山名屋浦里」(くまざわあかね原作、小佐田定雄脚本、今井豊茂演出)。笑福亭鶴瓶口演の落語が原作。勘九郎の酒井宗十郎が無骨な武士のいちずさを見せ、七之助の浦里は台詞に情味をもたせた。舞台転換がスピーディーで飽きさせない一幕。

九月が「秀山祭」。昼夜のそれぞれに吉右衛門の出し物があった。昼が「一条大蔵譚」。吉右衛門の大蔵卿の正気と狂気の切り替えが鮮やか。魁春の常盤御前。夜が「吉野川」。吉右衛門の大判事は武骨な中に子を思う父の情がにじみ、玉三郎の定高は娘雛鳥を第一に考える母の愛を見せた。染五郎の久我之助がりりしく、菊之助の雛鳥は恋を全うするうれしさを感じさせた。

十二月は「十二月大歌舞伎」。三部制で一部が絵本を原作にした新作「あらしのよるに」(きむらゆういち原作、今井豊茂脚本、藤間勘十郎振付・演出)。獅童の狼のがぶ、松也の山羊のめいの友情物。浄瑠璃やだんまりなど歌舞伎的技法をふんだんに盛り込んだ好作品。二部の序幕が中車、松也、七之助の「吹雪峠」。続いて「寺子屋」。「寺入り」からの上演。勘九郎の松王丸が子を失った悲しみを抑制を利かせて見せた。七之助の千代、松也の源蔵、梅枝の戸浪もいい。三部は最初が玉三郎の松山太夫、勘九郎の久兵衛の「二人椀久」。続いて「京鹿子娘五人道成寺」。玉三郎、勘九郎、七之助、梅枝、児太郎の五人の花子による華やかな一幕。

国立劇場は開場五十周年で歌舞伎は十月から記念公演がスタートし、十月から十二月までの三カ月は「仮名手本忠臣蔵」の全段通し上演が行われた。

十月の第一部が「大序」から「四段目」まで。幸四郎の由良之助に大きさ、梅玉の判官に品位の出た「四段目」が優れていた。

十一月の第二部が「五段目」から「七段目」まで、舞踊「道行旅路の花聟」。菊五郎、吉右衛門の出演で三部の中で最も見応えのある公演となった。「五、六段目」の勘平は菊五郎。落魄の悲しみの中に色気を感じさせた。「道行」と「六段目」のおかるは菊之助で勘平への思いを表現。「七段目」は吉右衛門の由良之助が遊興場面に柔らかさを出し、後の非情さを印象的にした。雀右衛門のおかるが勘平を失った悲しみをだし、又五郎の平右衛門が直情さと忠誠心を現した。

十二月の第三部が「八段目」から「十一段目」までと「花水橋引揚げ」。幸四郎の本蔵が「九段目　山科閑居」で娘のために命を捨てる親心を示した。梅玉の由良之助、魁春の戸無瀬、笑也のお石、児太郎の小浪。「十段目　天川屋」は上演の稀な場面だが、歌六の義平が由良之助に肩入れする侠気を見せた。

一月が「小春穏沖津白浪―小狐礼三」(河竹黙阿弥作、木村錦花改修、尾上菊五郎監修、国立劇場文芸研究会補綴)の通し。菊之助の礼三、時蔵の船玉お才、菊五郎の日本駄右衛門の三盗賊が大名家のお家騒動で、ひと肌脱ぐ。菊五郎劇団ならではの息のあった立ち廻りに見応えがあった。

六、七月が歌舞伎鑑賞教室で六月が「魚屋宗五郎」。橋之助の宗五郎が実直な男の怒りを出し、梅枝のおはまが夫を気づかう様子を見せた。萬太郎の主計之助、橘太郎の太兵衛、宗生、芝のぶのおなぎの配役。

七月が歌舞伎では久々の上演となった「卅三間堂棟由来」。魁春のお柳、弥十郎の横曽根平太郎。

新橋演舞場は一月が「初春花形歌舞伎」。獅童、海老蔵、市川右近らの出演で「車引」「白浪五人男」、「七つ面」。

十月が「GOEMON　石川五右衛門」(水口一夫作・演出)。愛之助の五右衛門。今井翼が五右衛門の父でイスパニアの宣教師、カルデロン神父。葛籠抜け、フラメンコ、鞘当など趣向だくさんの奇想に富んだ舞台。

大阪松竹座の一月は「初春大歌舞伎」。昼の序幕が「鳴神」(愛之助の鳴神上人、壱太郎の絶間姫)。中幕が「枕獅子」(扇雀)。最後が「らくだ」。中車の久六、愛之助の熊五郎がユーモラスなやりとりを見せた。夜の序幕が「帯屋」(坂田藤十郎の長右衛門、扇雀のお絹、壱太郎の長吉とお半、愛之助の儀兵衛、竹三郎のおとせ、寿治郎の繁斎)。藤十郎が女房お絹と若いお半の間で揺れる思いを見せた。壱太郎はお半を可憐に、長吉をユーモラスに見せた。中幕が「研辰の討たれ」。愛之助が軽薄でしたたかな辰次を軽快に演じた。中車の九市郎、壱太郎の才次郎。最後が「芝浜革財布」。中車の政五郎、扇雀の女房おたつが人情話をおもしろく見せた。

三月がスーパー歌舞伎Ⅱ「ワンピース」。エースの平岳大以外は、平成二十七年の新橋演舞場での初演とほぼ同じ配役。

七月が「七月大歌舞伎」。五代目雀右衛門襲名披露で、坂田藤十郎、仁左衛門、梅玉、橘之助らが参加。昼の序幕が「小さん金五郎」(鴈治郎の金五郎、孝太郎の小さん)。中幕が「夕霧名残の正月」(藤十郎の伊左衛門、雀右衛門の夕霧)。最後が「与話情浮名横櫛」の「見染」「赤間別荘」「源氏店」(仁左衛門の与三郎、雀右衛門のお富)。夜の序幕が「菊畑」(梅玉の虎蔵、橘之助の智恵内、歌六の鬼一、孝太郎の皆鶴姫)。続いて「口上」で、その後が「鳥辺山心中」(仁左衛門の半九郎、雀右衛門のお染)、最後が「芋掘長者」(橘之助の芋掘藤五郎、錦之助の友達治六郎、児太郎の緑御前)。

京都南座は耐震診断で補強工事をする可能性が出たため、二月に当面の休館が発表された。十二月恒例の「顔見世大歌舞伎」は先斗町歌舞練場で催された。

「五代目中村雀右衛門襲名披露」で三部制。一部が愛之助の「実盛物語」と「忠臣蔵　道行旅路の嫁入」(坂田藤十郎の戸無瀬、雀右衛門の小浪)。二部が「車引」(鴈治郎の梅王丸、愛之助の松王丸、孝太郎の桜丸、市蔵の時平)、「吉田屋」(仁左衛門の伊左衛門、雀右衛門の夕霧)、舞踊の「三升曲輪傘売」(海老蔵)。三部が「引窓」(仁左衛門の南与兵衛、弥十郎の

長五郎、孝太郎のお早)、「娘道成寺」(雀右衛門の花子、海老蔵の大館左馬五郎)。

博多座は二月が「坂東玉三郎特別舞踊公演」で「船辨慶」(玉三郎の静御前と知盛の霊、獅童の弁慶、児太郎の義経)、「草摺引」(獅童の五郎、児太郎の舞鶴)、「二人藤娘」(玉三郎、児太郎)。

四月がスーパー歌舞伎Ⅱ「ワンピース」。

六月が「博多座大歌舞伎」で「雀右衛門襲名披露」。雀右衛門は昼に「熊谷陣屋」の相模(仁左衛門の熊谷直実、時蔵の義経、菊之助の藤の方、歌六の弥陀六)、夜に「十種香」の八重垣姫(菊五郎の簑作、時蔵の濡衣、左團次の謙信)を勤めた。ほかには昼に「毛抜」(松緑の粂寺弾正)、「身替座禅」(菊五郎の山蔭右京、左團次の玉の井、松緑の太郎冠者)、夜に「引窓」(仁左衛門の南与兵衛、左團次の長五郎、孝太郎のお早)など。

十一月は「石川五右衛門」。平成二十六年一月に新橋演舞場で上演された作品の再演で海老蔵、獅童、市川右近、片岡孝太郎らの出演。

明治座は四月に菊之助、勘九郎、七之助らの「花形歌舞伎」で三人が果敢に初役に挑んだ。昼が「葛の葉」(七之助の葛の葉)、「末広がり」(勘九郎)、「女殺油地獄」(菊之助の与兵衛、七之助のお吉)、夜が「浮かれ心中」(勘九郎の栄次郎、菊之助のおすず)、「二人椀久」(菊之助の久兵衛、七之助の松山太夫)。

四月の「第三十二回四国こんぴら歌舞伎大芝居」は四代目鴈治郎襲名披露で愛之助、中車が参加。一部が「毛谷村」(愛之助の六助、壱太郎のお園)、「口上」、「幸助餅」(鴈治郎の幸助、中車の雷五良吉)、二部が「あんまと泥棒」(中車の秀の市、愛之助の泥棒権太郎)、「鷺娘」(扇雀)、「封印切」(鴈治郎の忠兵衛、壱太郎の梅川、愛之助の八右衛門)。

渋谷・コクーン歌舞伎は六月で「四谷怪談」(串田和美演出・美術)。扇雀のお岩と与茂七、獅童の伊右衛門、勘九郎の直助権兵衛、七之助のお袖。伴奏は邦楽器ではなく、トランペットなどの洋楽器と弦楽器を用いた。一部の台詞を字幕処理し、早いテンポで舞台を運んだ。

十月の「錦秋名古屋顔見世」は御園座が建て替え中のため、日本特殊陶業市民会館ビレッジホールが会場。仁左衛門、時蔵、染五郎らの出演で、昼が「壺坂霊験記」(孝太郎のお里、染五郎の沢市)、「ぢいさんばあさん」(仁左衛門の伊織、時蔵のるん)など、夜が「寺子屋」(仁左衛門の松王丸、染五郎の源蔵、孝太郎の千代、梅枝の戸浪)、「英執着獅子」(時蔵)、「品川心中」(染五郎の一八、梅枝のおたね)。

二月のシスティーナ歌舞伎は大塚国際美術館が会場。水口一夫作・演出の新作「美女と野獣」で愛之助、壱太郎、吉弥らの出演。

「第九回永楽館歌舞伎」は十一月に出石永楽館。愛之助、壱太郎、吉弥らで「輝虎配膳」「春重四海波」を上演。

巡業は公文協中央コース「松竹大歌舞伎」が六、七月で時蔵、松緑らの出演。「鳴神」(松緑の鳴神上人、梅枝の雲の絶間姫)、「文売り」(時蔵)、「三社祭」(亀寿の悪玉、萬太郎の善玉)。

同東コースが六、七月で染五郎、高麗蔵、歌昇、壱太郎。「晒三番叟」(壱太郎の如月姫)、「松浦の太鼓」(染五郎の松浦鎮信、歌昇の源吾、高麗蔵のお縫、橘三郎の其角)、「粟餅」(染五郎の杵造、壱太郎のおうす)。

同西コースが八、九月で「雀右衛門襲名披露」。幸四郎、梅玉が参加。「忠臣蔵七段目」(雀右衛門のおかる、幸四郎の由良之助、梅玉の平右衛門)など。

十月が「秋の特別公演　古典への誘い」。「勧進帳」(海老蔵の弁慶、獅童の富樫、九團次の義経)など。

十月の「松竹大歌舞伎」巡業は「獨道中五十三驛」。猿之助と巳之助がダブルキャストで十三役を早替りで勤めた。

十一月の「松竹歌舞伎舞踊公演」は愛之助、吉弥ら。「鷺娘」(吉弥)、「連獅子」(愛之助の狂言師右近後に親獅子の精、千太郎の狂言師左近後に仔獅子の精)。

若手俳優の勉強会も盛んであった。

松也は七月十三、十四、十五日にセルリアンタワー能楽堂で自主公演「挑む　第八回外伝」を開催。素踊りの「汐汲」、「武悪」などを

2016年の商業演劇

水落　潔

上演。

尾上右近は八月六、七日に国立小劇場で「研の會」を開催。「忠臣蔵五、六段目」（右近の勘平、米吉のお軽、染五郎の定九郎）、「船弁慶」（右近の静御前と平知盛の霊、種之助の舟長三保太夫、染五郎の弁慶、鷹之資の義経）。

鷹之資は八月八日に国立能楽堂で「第三回翔之会」を開催。仕舞「杜若」、長唄「助六」を素踊りで踊った。

歌昇、種之助兄弟は八月二十三、二十四日に国立小劇場で「双蝶会」を開催した。「車引」（種之助の梅王丸、梅丸の桜丸、歌昇の松王丸、又之助の時平）と「寺子屋」（歌昇の松王丸、種之助の源蔵、梅枝の千代、米吉の戸浪）の上演。

海外公演も行われた。五月三～七日が米ラスベガスで「獅子王ＳＨＩ－ＳＨＩ－Ｏ」。「石橋」を題材にした新作で染五郎、歌六、高麗蔵、歌昇、米吉らが出演した。

また四月二十九、三十日には幕張メッセの「ニコニコ超会議２０１６」で獅童が新作歌舞伎「今昔饗宴千本桜」の佐藤忠信でボーカロイドの初音ミクと共演した。

激動の年であった。六月に国民投票でイギリスがＥＵから離脱することを決め、十一月の選挙で次期アメリカ大統領に政治経験のない不動産業のトランプ氏が選ばれた。共に予想もしなかった事態であった。戦後70年間続いてきた互いに我慢して世界の秩序を維持するという考え方が通用しない時代になり、大衆の無意識の反乱が始まったのである。さらに暮になって韓国の朴大統領が弾劾され、シリアではロシアが支持している政府軍が勝利を収めた。一方でＩＳのテロが頻発し、難民がヨーロッパへ押し寄せ、それが原因で自国優先を主張する極右政党が支持を集めつつある。日本では熊本、鳥取で大地震が起こり、天皇が退位の意向を表明した。小池百合子氏が東京都初の女性知事に選ばれた。ＳＭＡＰが解散した。いずれの事柄も直接の関係はないものの、俯瞰すると共通した現象のように思われる。時代の動向が大きく変わりはじめているのである。

こうしたことを踏まえて商業演劇の世界を眺めると、イベント性の強い公演が観客を動員する傾向が益々強くなってきている。景気に左右される商業演劇では、雇用の改善、株価の上昇が追い風になって興行的には昨年よりよくなったそうだ。大劇場はジャニーズ系頼りの傾向が依然として強いものの、ミュージカル一辺倒だった路線に変化が出て来たようである。

新橋演舞場は多彩なプログラムを組んだ。一月は海老蔵を座頭にした歌舞伎、二月は「喜劇名作公演」と銘打って新派の水谷八重子、波乃久里子、松竹新喜劇の渋谷天外らに中村梅雀、古手川裕子らが加わった一座で「名代きつねずし」「単身赴任はチントンシャン」「じゅんさいはん」と新喜劇、新派の当たり狂言を今風に改作して上演した。三月は「劇団新感線春興行」と題して倉持裕作、いのうえひでのり演出「乱鶯」を上演した。元盗人団の頭で、今は彼の命を助けてくれた居酒屋の料理人になっている十三郎が、恩人の息子を助けるため悪の一味と対決するという冒険時代劇。古田新太が主演し、橋本じゅん、高田聖子、粟根まことら劇団員に稲盛いずみ、大谷亮介、山本享、大東駿介ら外部の俳優が加わり、派手でアクションが見ものの娯楽大作に仕上がった。四月は恒例のジャニーズ事務所の「滝沢歌舞伎」、五月はつかこうへい

作、錦織一清演出の「寝盗られ宗介」でジャニーズの戸塚祥太が主演した。女房に浮気を勧めることで愛情を確認するという旅廻り一座の座長と一座の姿を描いたつか作品独特の屈折し嗜虐的な喜劇で、高橋由美子、福田沙紀らが共演した。六月は三回目になる「熱海五郎一座」で座頭の三宅裕司が構成、演出、出演し、渡辺正行、ラサール石井、小倉久寛、春風亭昇太らレギュラーに、ゲストとして松下由樹、笹本玲奈が参加した。七月は短期間の「ＯＳＫ夏のおどり」の後、「松竹新喜劇七夕公演」で、藤山寛美の二十七回忌追善として昼に「愛の設計図」「浪花の夢　宝の入船」、夜に「夜明けのスモッグ」「はるかなり道頓堀」を上演し、孫の藤山扇治郎が祖父と同じ四役を熱演した。渋谷天外、小島慶四郎ら劇団員のほか水谷八重子、久本雅美らが出演した。八月は齋藤雅文脚本、宮本亜門演出のミュージカル「狸御殿」で、１９９６年に初演した作品の再演。染五郎が演じた若殿を尾上松也が演じ、瀧本美織、渡辺えり、小倉久寛、柳家花緑らが共演した。九月の前半は「新派特別公演」で歌舞伎から移籍した市川月乃助が二代目喜多村緑郎を襲名した。演目は昼が川口松太郎作「振袖纏」で、参加の尾上松也と瀬戸摩純が主演、続いて北條秀司作「深川年増」で喜多村が三十助を演じ、八重子のおぎん、英太郎のおよし、夜は泉鏡花の「婦系図」の通し上演で喜多村が主税、久里子がお蔦、八重子が小芳を演じ、昼夜に襲名披露の「口上」を上演した。歌舞伎からは猿翁一門の猿弥と春猿が参加し、春猿は十一月に河合雪之丞と改名して、17年一月に新派入りすることを発表した。喜多村は風姿に優れ口跡も良く、二つの役でも培ってきた実力を発揮した。雪之丞と共に新派の新戦力になるだろう。後半は美内すずえ原作、Ｇ２脚本・演出の「ガラスの仮面」で、幻の舞台「紅天女」を上演するまでの原作後半の物語を中心にした構成だった。貫地谷しほり、マイコ、一路真輝らが出演した。十月は愛之助と今井翼が共演した水口一夫作の新作歌舞伎「ＧＯＥＭＯＮ　石川五右衛門」。十一月は有吉佐和子原作、小幡欣治脚本、齋藤雅文演出「三婆」で、大竹しのぶが松子、キムラ緑子が駒代、渡辺えりがタキ、段田安井則が重助を演じた。作品自体の良さと芸達者が揃い面白い舞台に仕上がった。十二月は舟木一夫公演だった。

東宝は帝劇が今年もミュージカル路線を貫いた。作品名だけを列記するが、一月は「ジャニーズ・ワールド」、二、三月が「ショック」四、五月が「１７８９」、五月と六月前半が「天使にラブソングを」、六月後半から七月が「エリザベート」、八月が「王家の紋章」、九月が「ドリームボーイ」、十、十一月が「ミス・サイゴン」。十二月から17年一月が「ジャニーズ・オールスター・アイランド」である。

シアタークリエは年の前半はミュージカル中心で、後半は幾つかの大衆劇を上演した。一月は新作ミュージカル「花より男子」、二月は大竹しのぶ主演の「ピアフ」の再演、三月から六月はジャニーズ事務所系を中心にした若者向きのミュージカルを並べた。七月は「ジャージー・ボーイズ」、八月はこまつ座と提携して井上ひさし作、栗山民也演出の「頭痛肩こり樋口一葉」を新キャストで上演した。一葉は初出演の永作博美が演じ、三田和代、若村麻由美、熊谷真実、愛華みれ、深谷美歩が共演した。クリエ公演の後、各地を巡演した。九月は「ジャニーズ銀座」と題したミュージカル公演の後、十月半ばまで森光子の当たり役だった小野田勇作、三木のり平演出の「雪まろげ」を田村孝裕脚本・演出、高畑淳子の主演で上演した。榊原郁恵、柴田理恵、湖月わたる、的場浩司らが共演した。作品自体が面白いこともあるが出演者が揃い好舞台に仕上がった。十二月まで全国を巡演した。十月後半から十一月はじめにかけてはロベール・トマ原作、福島三郎上演台本・演出の「一人二役」を上演した。芸術座時代に「泥棒家族」の題名で上演した上質のサスペンス・コメディで、大地真央、森公美子、益岡徹ら腕のある出演者が揃い笑いを盛り上げた。十一月はミュージカル「貴婦人の訪問」の再演。十二月はニール。サイモンの「カム・フロー・ユア。ホーン」を福田雄一が上演台本・演出した「ナイスガイ・ｉｎ・ニュー

ヨーク」を上演した。井上芳雄のプレイボーイの兄と間宮祥太朗の生真面目な弟が巻き起こす喜劇で、高橋克実、吉岡里帆らが共演した。井上が劇中で映画版で歌ったフランク・シナトラの歌を歌う趣向もあり、楽しい舞台に仕上がった。昨年の「放浪記」に次いで森光子の当たり役を新しいキャストで上演する企画や、好舞台「ピアフ」の再演、「樋口一葉」「一人二役」「ナイスガイ・in・ニューヨーク」のように名作の新キャストでの上演や改訂上演など年配層を対象にした舞台が増えてきている。ジャニーズやミュージカルの若者路線と大衆演劇路線をどう塩梅していくのか、来年以降のプログラミングが注目される。東宝はこのほかミュージカル「ジギル&ハイド」を国際フォーラムで、「マイ・フェア・レディ」を東京芸術劇場で上演し、漫画を劇化した浜木綿子主演の「極楽町一丁目」を六、七月にかけて地方で巡演した。

明治座も歌手公演、歌舞伎、人情喜劇、時代劇と様々なジャンルの舞台を並べた。一月は「伍代夏子、藤あや子特別公演」で鏡花原作の「日本橋絵巻」と歌謡ショー、二月は前半が「福田こうへいコンサート」で、後半に西川辰美の漫画をモチーフにした堤泰之脚本・演出「おトラさん」を上演した。人形町の煎餅屋のお手伝いをしているおトラさんを梅沢富美男が演じる人情喜劇で、石野真子、篠田三郎、山本陽子らが共演した。三月は山本周五郎の小説から鎌田敏夫が脚色、石井ふく子が演出した「かあちゃん」で、藤山直美が裏長屋で親のない子を引き取って育てる、たくましくも情のあるお勝を演じ、中村雅俊、八千草薫、太川陽介が共演した。四月は花形歌舞伎、五月は中村橋之助、高島礼子というテレビと同じコンビが主演する平岩弓枝作、G2脚本・演出の「御宿かわせみ」で西村雅彦、高橋和也、朝海ひかるらが共演した。六月は「コロッケ特別公演」で青木隆治がゲスト出演した。七月は「北島三郎コンサート」、「明治座浜町寄席」、「島津亜矢公演」、八月は「志村魂」、ミュージカル「TARO　URASHIMA」という短期間の公演を並べた。九月は山本周五郎原作、黒土三男脚本、石井ふく子演出「おたふく物語」で藤山直美が妹思いの心優しい女を演じ、錦織一清、田中美佐子らが共演した。十月は「坂本冬美特別公演」、十一月は溝口健二の映画から堀越真が脚色し、以前芸術座で上演した「祇園の姉妹」を丹野郁弓演出、檀れい、剛力彩芽主演で上演した。民藝所属の丹野には商業演劇初演出、剛力には初舞台になった。松平健、葛山信吾、山本陽子が共演した。十二月には公演が無かった。明治座も歌手公演が年々減少し代わって藤山直美主演の舞台やテレビや映画で上演された人情劇が柱になってきた。年配層をターゲットに置いた舞台が増えてきている。

三越劇場は貸劇場として運営しているが、都内の中劇場が次々に閉鎖されていく状況を受けて演劇公演が増えてきている。一月はこの劇場を新しい本拠にしている新派が出演し、河竹黙阿弥生誕二百年記念と銘打って河竹登志夫原作「作者の家」を齋藤雅文が脚本・演出した「糸桜」と「新年踊り初め」を上演した。波乃久里子が黙阿弥の娘糸女、市川月乃助（喜多村緑郎）が養子の繁俊、大和悠河が妻のみつを演じて心温まる作品になった。新派は六月にも特別公演と題して川口松太郎作、久里子主演の「深川の鈴」と月乃助主演で新国劇の名作「国定忠治」を笠原章、伊吹吾郎らが共演して上演した。三月には久しぶりに国立劇場に出演、花柳十種の川口松太郎作「遊女夕霧」を久里子と月乃助が、八重子十種の榎本滋民作「寺田屋お登勢」を八重子が演じ中村獅童が客演した。

三越劇場に戻ると二月も松竹製作で北條秀司作「おばこ」を渡辺えり主演で上演した。その後のめぼしい公演を挙げると、三月には日本喜劇人協会公演、四月には向田邦子作、石井ふく子演出「花嫁」を高橋惠子、西郷輝彦らで上演した。十月には前進座が井上ひさし作、高瀬清一郎演出「たいこどんどん」を若手の中島宏太郎、早瀬栄之丞らで上演、十一月には劇団若獅子が「沓掛時次郎」を上演、また布施博一脚本「忍の一字」を秋本奈緒美、若林豪らが演じる公演もあった。十二月には民藝が公演している。このように短期間の公演が

多いが、大衆向きの演劇公演の数が増え、新しい顔を見せてきている。

前進座は大劇場の長期公演として一月に京都南座で今村文美主演の「夢千代日記」、五月に国立劇場で「東海道四谷怪談」を上演した。そのほか三越劇場の公演や「くずーい屑屋でござーい」、「切られお富」、「夢千代日記」、「棒しばり」「唐茄子屋」、「龍の子太郎」、「怒る富士」、「たいこどんどん」を全国各地で上演した。

テレビ局制作公演ではＴＢＳがホリプロと提携して三月にシアターＡＣＴで三島由紀夫の「ライ王のテラス」を上演、ＮＴＶが２０１４年に初演したマキノノゾミ作「真田十勇士」を九、十月に新国立劇場で上演した。

名古屋地区は中日劇場が商業演劇の拠点になっている。自前の製作は止めて貸劇場になっているが、今年も多彩なプログラムが並んだ。一月は「細川たかし　中村美律子公演」、二月は「宝塚花組」、三月は東宝制作の「ピアフ」や落語、歌手のコンサート、四月も森進一、倍賞千恵子らのコンサートなど短期間公演を並べた。五月は前半がミュージカル、後半には劇場50周年企画として山本周五郎原作「ゆうれい長屋は大騒ぎ」を鳥羽一郎、石原詢子、左とん平らで短期間上演、その後松竹製作「寝盗られ宗介」を上演した。六月は東宝製作「極楽町一丁目」と「宝塚雪組」、七月は「五木ひろし公演」ほか、八月は認知症の母のことを綴った岡野雄一郎原作「ペコロスの母に逢いに行く」ほか、九月はこまつ座の「頭痛肩こり樋口一葉」ほか、十月はミュージカル「エリザベート」、十一月は「吉幾三公演」ほか、十二月は「よしもと爆笑喜劇」や東宝製作「一人二役」ほかであった。

大阪の松竹座は一月が歌舞伎、二月は桂米朝追善芝居と銘打って故人が得意にしていた落語「地獄八景亡者戯」を小佐田定雄脚本、齋藤雅文演出で上演した。桂ざこば、桂南光、三林京子ら故人の一門のほかＯＳＫのメンバーやタレントが出演した。三月は昨年新橋演舞場で初演した「ワンピース」、四月も演舞場と提携した「寝盗られ宗介」、五月は前半が「ＯＳＫ春のおどり」、後半が藤山寛美十七回忌追善の「松竹新喜劇」で「夜明けのスモッグ」と「大当たり高津の富くじ」を上演した。六月は浅野ゆう子、村上弘明、有森也実らが出演した「七変化ねずみ小僧捕物帳」、七月は歌舞伎で、八月は若者向けのサマーショー、九月は演舞場と連携して前半が「ガラスの仮面」、後半が「二代目喜多村緑郎襲名披露新派公演」になった。十月は短期間公演を並べ十一月は昨年演舞場で演じた「笑う門には福来たる」。吉本の創業者吉本せいの生涯を綴った舞台で藤山直美が主演した。十二月は恒例の「関ジャニ」のショーであった。

新歌舞伎座は歌手公演を中心にした路線を貫いた。一月が「川中美幸」、二月は明治座で上演した藤山直美主演の「かあちゃん」、三月は「舟木一夫」、四月は小幡欣治作「三婆」で水谷八重子、浅丘ルリ子、山本陽子が共演した。五月は「五木ひろし」、六月は「島津亜矢」、七月は短期公演を並べ、八月は「中村美律子」、九月は「梅沢富美男」、「香西かおり」、「天童よしみ」、十月は「福田こうへい」「コロッケ」、十月は歌手やタレントの短期公演のあと東宝製作の「一人二役」、十二月は「神野美伽」と「松竹新喜劇」というラインアップだった。京都の南座は一月に「松竹新喜劇」と「前進座」の公演をしたが、二月になって「改正耐震改修促進法」によって、耐震設備に問題があることが分り二月から休座することになった。祇園の歌舞練場も同様の措置をした。ともに部分的な改修で済むのか抜本的な工事が必要なのか、目下調査を続けている。

博多座は一月が昨年シアタークリエで初演した「放浪記」の引っ越し公演。二月が「玉三郎舞踊公演」、三月は改修工事のため休座、四月は「ワンピース」、五月は「宝塚宙組」、六月は「歌舞伎」、七月は池田政之作、北村文典演出の「梅と桜と木瓜の花」。黒田藩のお家騒動を三人の婆さんが活躍して納めるという時代喜劇で武田鉄矢、中村玉緒、柴田理恵が共演した。八月は「エリザベート」、九月は「北島三郎コンサート」と「ジャニーズ」、十月は明治座で演じた「おたふく物語」の引っ越し公演、十一月は「花形歌舞伎」、十二月は例年通

2016年の現代演劇

林　尚之

り市民に開放した。

今年も多くの演劇関係者が亡くなった。前進座を牽引してきた中村梅之助（1月19日、85歳）、演出家の蜷川幸雄（5月12日、80歳）、維新派のリーダー松本雄吉（6月18日、69歳）、多彩な分野で活躍した永六輔（7月7日、83歳）、文楽人形遣い吉田文雀（8月20日、88歳）、俳優の平幹二朗（10月22日、82歳）、新派女方の英太郎（11月11日、81歳）、俳優の根津甚八（12月29日、69歳）の各氏で冥福を祈りたい。

演出家の蜷川幸雄が5月に81歳で亡くなった。69年に清水邦夫作「真情あふるる軽薄さ」で演出家デビューして以降、半世紀近くにわたって日本の演劇界を牽引した。晩年は車椅子に座り、酸素呼吸器を使いながら、演出を続けた。1月の秋元松代作「元禄港歌〜千年の恋の森」の稽古途中に入院。2月に蜷川の半生をマームとジプシーの藤田貴大が書き下ろした新作「蜷の綿」を蜷川と藤田がそれぞれ演出して上演する予定だったが、入院で中止となり、蜷川演出の集大成ともいえる「リチャード二世」が再演された。亡くなった直後に上演された「尺には尺を」は、病床に稽古の模様を撮った映像を持ち込み、蜷川がチェックした最後の演出作となった。これまで支えてきた演出補井上尊晶をはじめ「チーム蜷川」のスタッフが演出プランを忠実に再現した。8月の唐十郎作「ビニールの城」の演出は金守珍に代わり、12月に総合演出を予定した「1万人のゴールド・シアター2016金色交響曲」は脚本のノゾエ征爾が演出を引き継ぎ、高齢者約1600人が出演した。蜷川がシェークスピア作品全37作の上演を目指し始めた「さいたまシェイクスピアシリーズ」の2代目芸術監督に吉田鋼太郎が就任。17年12月「アテネのタイモン」を皮切りに、あと5作となった全作上演を目指す。蜷川の遺産でもある高齢者劇団「ゴールド・シアター」、若手劇団「ネクスト・シアター」の存続も決まった。

蜷川の死から半年後、「近松心中物語」「NINAGAWAマクベス」など数多くの蜷川作品に主演した平幹二朗が82歳で急死した。葬儀で「戦友」蜷川への思いを込めた弔辞が感動的だった平は2月まで「王女メディア」の全国巡演を行った。78年に蜷川演出で初演、ギリシアでも上演した。亡くなる半月前まで、17世紀のロンドン・グローブ座を舞台に少年俳優に教える元名優役で主演した「クレシダ」では卓越した演技、明晰な台詞術をみせた。

若手演出家の小川絵梨子が新国立劇場の芸術監督に決まった。18年から4年の任期となる。就任時に39歳の若さで、歴代最年少となる。米アクターズスタジオ大学院に演劇留学し、日本では10年のサム・シェパード作「今は亡きヘンリー・モス」で演出デビュー以来、「スポーケンの左手」「RED」などで着実に実績を上げ、13年の千田是也賞も受賞した。今年も、ナチス占領下のデンマークで核開発をめぐる2人の世界的物理学者（段田安則、浅野和之）の対話を描いたマイケル・フレイン作「コペンハーゲン」を演出し、翻訳家としても03年トニー賞作品賞受賞「テイク・ミー・アウト」の翻訳があった。特定の劇団に属さず、フリーの立場で経験を積み重ねた人だけに、どう新風を吹き込むかに期待がかかる。

劇作でも女性の活躍が顕著だった。風琴工房を主宰する詩森ろばは、広島の原爆で亡くなった宝塚歌劇出身の女優園井恵子（林田麻

里)を主人公にした「残花〜1945さくら隊園井恵子〜」、戦後の沖縄のやくざ抗争と沖縄返還を巡る当時の佐藤栄作首相の密使の動きが並行する「OKINAWA1972」、インサイダー取引を巡る男たちの姿がリアルな「insider」、福祉車両開発の苦労を描いた「4センチメートル」と多作で、演出も手掛けた「残花」「insider」の成果で紀伊国屋演劇賞個人賞を受賞した。

てがみ座の長田育恵は、亡命した旧ソ連のノーベル賞受賞詩人ヨシフ・ブロッキー(半海一晃)と娘(石村みか)の壮絶な愛憎劇「対岸の永遠」(上村聡史演出)、葛飾北斎の娘お栄(三浦透子)が絵師として歩み出すまでを描いた「燦々」(扇田拓也演出)、劇団民藝に民芸運動の創始者柳宗悦(篠田三郎)が白磁に魅せられ、日本の植民地化にあった朝鮮と関わっていく「SOETSU 韓くにの白き太陽」(丹野郁弓演出)を発表。井上ひさしに師事した若手は、評伝劇で独自の道を切り開いている。

ミナモザ主宰の瀬戸内美咲も「埒(らち)もなく汚れなく」で、若くして亡くなった劇作家大野竹正則(西尾友樹)の半生を描き、エピソードの積み重ねに終わらない、エッジの利いた舞台に仕上げた。劇団KAKUTAの桑原裕子の「愚図」は主演に落語家林家正蔵を招き、生きることに不器用な人々の群像劇。パラドックス定数の野木萌葱は「三億円事件」(和田憲明演出)で、時効直前の捜査員たちの葛藤を描いた。

「大看板」だった蜷川亡き後の演劇界を牽引する演出家は栗山民也、文学座の鵜山仁だろう。栗山は本土出身の上官(山西惇)と沖縄出身の新兵(松下洸平)が戦後も木の上で潜伏した史実をもとに、井上ひさしの構想を引き継いだ蓬莱竜太の脚本によるこまつ座「木の上の軍隊」再演は、より研ぎ澄まされた演出で、沖縄戦、今も続く沖縄問題の悲劇を鮮明にした。パキスタン系米国人弁護士(小日向文世)を主人公にしたアヤド・アフタル作「DISGRACED 恥辱」では、トランプを大統領に選んだ米国社会に根強くある差別を浮き彫りにし、トム・ストッパード作「アルカディア」、ジョン・フォード作「あわれ彼女は娼婦」、蓬莱作「母と惑星について、および自転する女たちの記録」と多岐に渡った。

鵜山は新国立劇場で上演時間6時間近いシェークスピア作「ヘンリー四世」を第1部混沌」「第2部戴冠」の2部構成で演出。ロック音楽が流れ、ヘッドホンをしたハル王子(後のヘンリー五世、浦井健治)は現代の若者風で、取り巻きのフォルスタッフ(佐藤B作)との放蕩を経た成長劇としての馴染みやすさがあった。ほかにイプセン作「幽霊」、別役実作「街と飛行船」、井上ひさし作「父と暮らせば」など1年で10作品も演出した。

ナイロン100℃のケラリーノ・サンドロヴィッチは、ウディ・アレンの映画「カイロの紫のバラ」に想を得た台本・演出「キネマと恋人」で映画を愛する女性(緒川たまき)と映画に出演する俳優(妻夫木聡)の恋を軸に、鮮やかなステージングとともに全編に映画愛が満ちていた。母(麻実れい)と3姉妹(秋山菜津子、常盤貴子、音月桂)の壮絶な闘いを描くトレイシー・レッツのピューリッツァー賞受賞作「8月の家族たち」の演出でも笑いの中で、憎しみと表裏にある家族の繋がりが切ない。古田新太と組んだ作・演出「ヒトラー、最後の20000年〜ほとんど、何もない」で確信犯的おふざけ連発が舞台を活気づけた。

演劇集団円の森新太郎は、孤島に住む体に障害を持つ青年ビリー(古川雄輝)を主人公にしたマーティン・マクドナー作のブラック・コメディー「イニシュマン島のビリー」、ナチス時代の同性愛者(佐々木蔵之介)の究極の愛を描いたマーティン・シャーマン作「BENT」、平最後の舞台となったニコラス・ライト作「クレシダ」、近松門左衛門の浄瑠璃台本「出世景清」をもとにフジノセツコ脚本、橋爪功主演の円公演「景清」と、色合いの異なる作品を演出した。特に「景清」は景清役の橋爪とその娘以外は俳優が遣う人形という実験的な演出で、景清の悩み、苦しみ、慟哭がストレートに伝わった。

若手では蜷川のもとで約10年、演出助手を務めた藤田俊太郎の進境が著しい。東野圭吾の同名小説のミュージカル版「手紙」、ブロー

ドウェー・ミュージカル「ジャージー・ボーイズ」で師匠譲りの大胆かつ繊細な演出をみせ、米大リーグを舞台にスター選手の突然の同性愛告白で大混乱となるリチャード・グリーンバーグ作のブラック・コメディー「テイク・アウト・ミー」でも、小さな舞台空間を巧みに使い、魅力的な作品に仕上げた。

最近は新作上演が年1本の野田秀樹の作・演出「逆鱗(げきりん)」は、松たか子演じるNINGYO(人魚)をめぐる話が71年前の悲劇に昇華する。最近の傾向である反戦メッセージ色が強く、衣装、美術、照明すべてに独創的な舞台だった。20年東京五輪に向けた文化プログラム「東京キャラバン」にも取り組み、リオ五輪のプレイベントにも参加。国内外の民俗芸能を取り入れ、祝祭的なパフォーマンスを繰り広げた。

岩松了は倦怠期の夫婦を通して不可解な人間関係を紡ぎ出した「家庭内失踪」、松尾スズキは内戦、テロ、自己責任、人身売買など様々なテーマを詰め込んでスケールの大きい「ゴーゴーボーイズ　ゴーゴーヘブン」を発表。平田オリザは生活支援を行うNPOオフィスが舞台にした「ニッポン・サポート・センター」を主宰する青年団に8年ぶりに書き下ろした。

30代、40代の劇作家の活躍も目立った。モダンスイマーズの蓬莱竜太はパリのテロ事件を背景にセックスレスの夫婦を描いた「嗚呼いま，だから愛。」、奔放な母(斉藤由貴)に振り回された3姉妹(田畑智子、鈴木杏、志田未来)の対立と許しが鮮やかな「母と惑星について」、および自転する女たちの記録」、問題を抱える青年(向井理)が理想としたコミューンで直面する現実が苦い「星回帰線」を発表。3作とも質が高く、1年を通して最も充実した。イキウメの前川知大は柳田国男「遠野物語」を下敷きに、ヤナギダと名乗る男(仲川トオル)が異界の話を掘り起こす「遠野物語・奇ッ怪其ノ参」で前川独自の舞台の進化をみせた。

中津留章仁は劇団民藝でブラック企業を背景に日本の経済構造に迫り、経営者家族(西川信明、樫山文枝)の有り様を問う「箆棒」、青年劇場で武器部品製造の依頼が舞い込んだ町工場の家族のジレンマを描く「雲ヲ摑ム」、東演では本土と沖縄の基地問題への温度差を描く「琉球の風」を作・演出。主宰のトラッシュマスターズでは宗教を巡る会話劇「猥り現(みだりうつつ)」、民間軍事会社への転身を図る警備会社を舞台にした「殺人者」と、現代日本が抱える様々な問題に切り込んだ。劇団桟敷童子の東憲司は演劇集団円で「透明な血」を作・演出し、劇団では認知症をめぐる家族の結び付きが愛おしい「夏に死す」、ドロドロとした人間関係を軸にした活劇風「モグラ　月夜跡隠し伝」を上演した。

THE SHAMPOO HATの赤堀雅秋は「同じ夢」でダメ人間たち(光石研、田中哲司ら)のずるさ、弱さを引き出し、心に染みる作品を作り上げた。ハイバイの岩井秀人は自伝的な作品「夫婦」で、横暴な夫(猪股俊明)とそれに従う母(山内圭哉)や息子である自身を描きつつ、普遍的な家族の姿が浮かび上った。劇団チョコレートケーキの古川健は福島原発事故で故郷を追われた人々の思いを31文字の短歌に凝縮した「悦歌」(日澤雄介演出)、谷賢一の「テレーズとローラン」はゾラの同名名作をもとにしながら、若い男女が愛に溺れる姿を鋭角的に描いた。五反田団の前田司郎は「宮本武蔵(完全版)」で、これまでとは180度違う武蔵像を描き出し、脱力感ある舞台が新鮮だった。

翻訳劇も、海外での話題作が間をおかずに上演され、断絶と不寛容の潮流を反映した苦い作品が多かった。シアター風姿花伝のジョー・ペンホール作、千葉哲也演出「いま、ここにある武器」は武器の輸出をめぐる兄弟(中嶋しゅう、千葉哲也)の対立が描かれ、シアタートラムのフィリップ・リドリー作、白井晃演出の「レディエント・バーミン」は、夢の家に移り住んだ若い夫婦(高橋一生、吉高由里子)が直面する消費社会の変調を描き、生き方を問うブラック・コメディー。13年ピューリッツァー賞受賞のアニー・ベイカー作「フリック」で、マキノノゾミの演出は時代遅れの映画館で働く若者たち(木村了、ソニン)の屈折した青春群像を照射

した。

17年に創立80周年を迎える文学座をはじめ、各劇団は意欲的な作品を上演した。文学座のイプセン作「野鴨」は坂口芳貞、小林勝也ら熟練の演技に加え、若手の稲葉賀恵が切れ味鋭い演出をみせた。アレクシ・ケイ・キャンベル作、上村聡史演出「弁明」は時代の先頭を走った女性(山本道子)と子供のむき出しのぶつかり合いから家族の再生の道が見える佳作。80周年記念公演第1弾として水上勉作「越前竹人形」、久保田万太郎作「かどで」「舵」を上演。「越前」の玉枝役の山本郁子は文学座の女優らしい存在感が光った。

民藝は代表である87歳の奈良岡朋子が岡本健一とテネシー・ウイリアムズの二人芝居「二人だけの芝居〜クレアとフェリース」(丹野演出)に挑んで気を吐いた。炭鉱で働く男たちの画家集団を描いたリー・ホール作「炭鉱の絵描きたち」(兒玉庸策演出)のほか、中津留、長田と若手作家を起用した舞台でベテランの樫山、日色ともゑが強い印象を残した。

俳優座は戦中戦後を舞台にした問題作を相次いで上演した。終戦で朝鮮から脱出した時に精神に異常をきたした男(中野誠也)を通して戦争責任を問う安部公房作「城塞」(眞鍋卓嗣演出)、戦争末期の軍需工場に学徒動員された若者たちが痛々しい宮本研作「反応工程」(小笠原響演出)、海尊と名乗る法師が流浪する貴人伝説を背景に、学童疎開し孤児となった少年の姿を描く秋元松代作「常陸坊海尊」(安川修一演出)を上演。若手たちが中心となって取り組み、老舗劇団の気概をみせた。

青年座は矢代静一作「天一坊十六番」を金澤菜乃英の演出で再創造し、海外戯曲第4弾のジョン・ロビン・ベイツ作「砂漠のクリスマス」(須藤黄英演出)はテロの時代に家族のあり方を問う秀作だった。青年劇場は「郡上の立百姓」をベテランから若手までの総力戦で上演。演出の藤井ごうはエネルギー溢れる舞台を作り上げ、同作などで千田是也賞を受賞した。劇団昴はギリシア悲劇を再構成した7時間に及ぶジョン・バートン作「グリークス」(上村演出)を通し上演。ゴーリキ作「どん底」(村田元史演出)でも多彩な出演者が揃い、劇団の総合力を感じた。

創立31年目の演劇集団キャラメルボックスは「嵐になるまで待って」「ゴールデンスランバー」など6作を上演し、作・演出の成井豊はエンターテインメントな舞台を作り続けている。東京演劇集団風もブレヒト作「マハゴニー市の興亡」、フランスの現代作家マティ・ヴィスニュック作「ジャンヌ・ダルク」と、骨太な舞台で存在感を保った。

公共劇場は、新国立劇場が別役実の新作「月・こうこう、風・そうそう」を宮田慶子演出で上演。不条理劇の第一人者である別役作品に取り組んだ「別役実フェスティバル」の最後を飾り、かぐや姫伝説をめぐる謎めいたドラマに仕上げた。在日コリアンの戦後をたどる鄭義信の在日3部作「焼肉ドラゴン」「たとえば野に咲く花のように」「パーマ屋スミレ」を通し上演で再演。在日の歴史から日本が抱える裏面史が鮮明になった。

世田谷パブリックシアターは、KERA・MAPとの共同制作「キネマと恋人」のほか、野村萬斎演出・主演「マクベス」を再演。東京芸術劇場はシンガポール、インドネシアとの国際共同制作で、90年に野田秀樹が書き下ろした「三代目、りちゃあど」をシンガポールのオン・ケンセンが演出。歌舞伎の中村壱太郎、狂言の茂山童司らが出演し、影絵も使って色彩豊かな舞台だった。藤田貴大演出「ロミオとジュリエット」は独特のリフレインを駆使し、少女たちが紡ぐ物語として再構築した。神奈川芸術劇場では芸術監督に就任した白井晃の就任第1弾となったストリンドベリ作、白井演出「夢の劇〜ドリーム・プレイ」は空間処理が鮮やかな万華鏡のような舞台だった。

最近多くなったプロデュース公演は玉石混合だった。映像で知名度あるスター俳優を使っただけの公演や、漫画やゲームをもとに安易に舞台化したものが乱造されている。その中で、充実した舞台を上演したのがシーエイティプロデュース。「クレシダ」「テイク・ミー・アウト」などの上演で紀伊国屋演劇賞団体賞を受賞した。シスカンパニーも「アル

カディア」、北村想作「遊侠　沓掛時次郎」（寺十吾演出）、大河ドラマ「真田丸」を終えた三谷幸喜の作・演出「エノケソ一代記」などを上演。「エノケソ一」は昭和の喜劇王エノケンこと榎本健一の偽者エノケソ（市川猿之助）の命をかけてエノケンに成りきろうとした悲哀が人間としての普遍的テーマに昇華した。こまつ座は「木の上の軍隊」のほか、「紙屋町さくらホテル」「頭痛肩こり樋口一葉」を上演。トム・プロジェクトは「砦」「挽歌」のほか、ふたくちつよし作・演出「百枚めの写真」「静かな海」を上演し、問題意識ある舞台が並んだ。

若手では岡田利規率いるチェルフィッチュが「部屋に流れる時間の旅」欧州ツアーを敢行した。三浦基の地点は「かもめ」「桜の園」など古典の大胆な読み直し舞台を見せた。

寺山修司、つかこうへいの作品もよく上演された。寺山作品は美輪明宏主演・演出「毛皮のマリー」、藤田俊太郎演出で宝塚歌劇出身者らが出演した男装音楽劇「くるみ割り人形」、つか作品は扉座が横内謙介の上演台本・演出「郵便屋さんちょっと２０１６」、岡村俊一演出「引退屋リリー」「新・幕末純情伝」など。「郵便屋さん」は初期のつからしい熱気があった。

来日公演も多彩だった。「国際演劇祭　イプセンの現在」は国内外６団体がイプセンの代表作「人民の敵」「ヘッダ・ガブラー」をそれぞれ独自の解釈で上演した。特にノルウェーのヴィジョンズシアターの「ヘッダ・ガブラー」はヘッダを演じた演出家ユーニー・ダールをはじめとした演技陣が充実。大人の演技で、イプセンの世界が眼前で展開しているようなリアリティーがあった。国際舞台芸術祭「フェスティバル・トーキョー２０１６」ではポーランドの巨匠クリスチャン・ルパの話題作「Ｗｏｏｄｃｕｔｔｅｒｓ　伐採」が４時間を超える大作ながら、ガラス箱の回り舞台とビデオを巧みに使って圧倒的だった。カナダのロベール・ルパージュの作・演出・美術・出演「８８７」は、想像力を刺激される舞台だった。ロイヤルシェイクスピアカンパニーの気鋭ジョナサン・マンビィが演出したアーサー・ミラー作「るつぼ」は堤真一らが主演し、フェイク（偽）ニュースが取り沙汰される現代に通じる舞台になった。

ベテランの活躍も見逃せない。84歳の仲代達矢は無名塾公演「おれたちは天使じゃない」で軽妙な演技をみせ、全国を巡演した。83歳の浅利慶太は「この生命誰のもの」、ジャン・アヌイ作「アンチゴーヌ」を演出し、健在ぶりを発揮した。

73年開場のパルコ劇場が建て替えのため一時閉館した。過去に「ショーガール」をはじめ、ゲイを主人公にした「真夜中のパーティ」、ニール・サイモン作「ブライトン・ビーチ回顧録」などを上演し、最後は朗読劇「ラヴ・レターズ」で締めくくった。20年に再開場する。

蜷川、平のほかに、大阪を拠点に独創的な野外劇で国内外で高い評価を受けた劇団維新派の松本雄吉、水上勉作品を脚色した「ブンナよ、木から下りてこい」の劇作家小松幹生、「怪談牡丹燈籠」の脚本で知られる大西信行、音楽座を主宰し、ミュージカルの脚本・演出を手掛けた相川レイ子、文学座、劇団雲、劇団欅を経て劇団昴所属の大ベテラン俳優の稲垣昭三、唐十郎主宰の劇団状況劇場の看板俳優だった根津甚八、劇団仲間の創設に参加し、児童演劇に取り組んだ伊藤巴子が亡くなった。海外の劇作家では「調理場」のアーノルド・ウェスカー、「アマデウス」のピーター・シェーファー、「ヴァージニア・ウルフなんかこわくない」のエドワード・オルビーが亡くなった。

2016年のミュージカル

横溝幸子

ブロードウェイやオフ・ブロードウェイ、ウエストエンド、ウィーン、フランス・ミュージカルに新たにオーストラリア・ミュージカルが加わり、ミュージカル公演はますます多彩になった。「セーラームーン」「ドラゴンクエスト」など漫画やゲームをミュージカル化した2．5次元ミュージカルも大がかりになってゆく。ミュージカル界の大きな動きとして竹芝地区再開発事業のため、四季劇場〔春〕と〔秋〕が2017年6月末で閉鎖される。隣接の自由劇場はそのまま残るため、劇団四季の東京の拠点劇場は、5劇場から〔夏〕〔海〕自由劇場の3劇場になる。

劇団四季の新作「ノートルダムの鐘」

「ノートルダムの鐘」は「美女と野獣」「ライオンキング」「アイーダ」「リトルマーメイド」「アラジン」に続くディズニー提携作品第6弾。12月11日から2017年6月25日まで〔秋〕での期間限定公演である。14年にアメリカのインディゴで初演、15年ニュージャージーで上演されただけでブロードウェイやウエストエンドは未上演作品だ。ヴィクトル・ユーゴーの小説をもとにピーター・パーネル脚本、スティーヴン・シュワルツ作詞、アラン・メンケン作曲、スコット・シュワルツ演出。これまでのファンタジックなディズニー作品と異なり、ドラマチックで大人向きだ。

15世紀末のパリ。ノートルダム大聖堂の鐘楼で育ったカジモド。密かに世話する聖職者フロロー、警備隊長フィーバスの3人が愛するジプシーの娘エスメラルダ。人生の悲哀、優しさ、脆さなど登場人物が背負わざるをえなかった宿命が、人間ドラマとして描かれている。美と醜、愛と欲望、善と悪、光と闇など相反する要素がからみ合い、舞台上のクワイア（聖歌隊）が大きな役割を担う。

カジモドは1600人の応募者の中からオーディションで海宝直人（外部）、飯田達郎、田中彰孝の3人が選ばれた。フロローは芝清道、野中万寿夫。エスメラルダは岡村美南、宮田愛。東京公演終了後、京都劇場（17年5月）・KAAT神奈川芸術劇場（18年4月）での公演が決まっている。「オペラ座の怪人」もKAATで公演（17年3月25日－8月13日）する。1999年からロングラン中の「ライオンキング」は、17年5月28日で〔春〕の公演を休止、7月より四季劇場〔夏〕〔大井町〕に移動し公演を継続する。「リトルマーメイド」は17年4月に公演を打ち切り、8月から福岡・キャナルシティ劇場に移る。

1999年5月開場の新名古屋ミュージカル劇場（名古屋市中区）は8月21日閉館。新拠点の「名古屋四季劇場」（中村区）は10月16日、「リトルマーメイド」で開場した。「アラジン」（電通四季劇場〔海〕）は2年目を迎えたが、チケットは17年12月まで完売している。「ウエストサイド物語」はジョーイ・マクニーリーの新演出版。児童招待プロジェクト「こころの劇場」は、ファミリーミュージカル「王子とこじき」「エルコスの祈り」「ガンバの大冒険」の3本で全国縦断公演（177都市・487公演・56万人動員）を行った。

劇団四季社長退任後、浅利演出事務所を設立した浅利慶太は、自由劇場でミュージカル「李香蘭」（浅利慶太構成・演出、三木たかし作曲）を野村玲子主演で上演するなど、83歳になっても舞台への情熱は衰えない。

2008年以来入場料は9800円（税込）に据え置かれたが、4月に10000円（税込10800円）に値上げした。ただ、「ノートルダムの鐘」の入場料金は1180

0円だった。

東京・大阪・京都・名古屋・札幌・仙台・福岡と全国公演を合わせた16年の全上演回数は3164回、315万人を動員、総売り上げ額は前年比4億4000万円増の201億円が見込まれている。

新作上演に意欲を見せた東宝

再演物が多い東宝が、積極的にシアタークリエや日生劇場で新作を上演した。帝劇での5ヵ月間のジャニーズ公演は変わらない。

帝劇初演作品は2本。フレンチ・ポップ・ミュージカル「1789－バスティーユの恋人たち」(4月9日－5月15日)は、ドーブ・アティア&アルベール・コーエン作・作詞で音楽はドーブ・アティアら12人いる。12年のパリ初演後、15年4月に小池修一郎潤色・演出で宝塚歌劇月組が初演した。今回の男女優による東宝版は、宝塚で龍真咲が牢獄によじ登るプロローグはカットされた。革命運動に身を投じるロナン(小池徹平・加藤和樹)、妹のソレーヌ(ソニン)は娼婦に身を落とす。配役も花總まりのマリー・アントワネットのほか、宝塚男役トップスターだった凰稀かなめが退団後初めて王妃役で登場したのは驚きだった。映像が多用された。

人気少女漫画「王家の紋章」(8月3日－27日)は世界初のミュージカル化である。細川智栄子あんど芙～みん原作・荻田浩一脚本・作詞・演出。作曲は「エリザベート」のシルヴェスター・リーヴァイ。現代のアメリカ人少女キャロル(宮澤佐江・新妻聖子)がタイムスリップした古代エジプトでメンフィス王(浦井健治)と出会い、恋に落ちる。陰謀が渦巻く中で女王アイシス(濱田めぐみ)やヒッタイト王子イズミル(宮野真守・平方元基)の思惑がからむ。

再演物は3本。「天使にラブソングを～シスター・アクト」(5月22日－6月20日)は2年ぶり。クラブ歌手デロリスは森公美子のほか新たに元宝塚歌劇トップスターの蘭寿とむが加わった。石井一孝・大澄賢也・鳳蘭らは初演と同じ。

15年6月に新演出版で上演されたばかりの「エリザベート」(6月28日－7月26日)が早くも再演後四都市を巡演した。2000年6月から始まった東宝版は、10月の中日劇場公演で上演回数1292回を数える。

「ミス・サイゴン」(10月15日－11月23日)も2年ぶりの再演である。前回途中休演した市村正親がエンジニア役で復帰したが、これがファイナル公演になる。トリプルキャストで前回の駒田一のほかロッカーのダイヤモンド☆ユカイが初登場した。「ミス・サイゴン」は1992年の初演から17年1月のツアー公演まで上演回数は1463回を数える。

シアタークリエが頑張っている。日本初演の「ジャージー・ボーイズ」(6月29日－7月31日)は、2016年のミュージカル界屈指の舞台と言える出来栄えであった。「シェリー」「君の瞳に恋してる」など数々のヒット曲を産み出したフランキー・ヴァリとザ・フォーシーズンズの実話をもとに頂点を極めた彼らの光と闇を描いた物語。トワングという発声ができないと上演許可がおりないそうだが、それをクリアした中川晃教がフランキー・ヴァリを主演した。その声が最高に素晴らしかった。中川を除く3人はWキャストで赤組は藤岡正明・矢崎広・吉原光夫。白組は中河内雅貴・海宝直人・福井晶一。藤田俊太郎演出。「ジャージー・ボーイズ」は第24回読売演劇大賞の最優秀作品賞を、中川晃教は最優秀男優賞を受賞した。

「エドウィン・ドルードの謎」(4月4日－25日)は、トニー賞5部門受賞の観客参加型の異色作。チャールズ・ディケンズの未完ミステリーのミュージカル化で、結末は288通りあるそうだ。元宝塚歌劇トップスターの壮一帆主演作品。「RADIANT BABY」(6月6日－22日)は31歳でエイズ死した現代美術家キース・ヘリングの生涯を描いたオフ・ブロードウェイ作品。キースは柿澤勇人。「ナイスガイ・イン・ニューヨーク」(12月7日－27日)は、1964年フランク・シナトラで映画化されたニール・サイモンの処女戯曲。プレイボーイの兄(井上芳雄)と生真面目な弟(間宮祥太朗)が後半は完全に入れ

違ってしまう。井上がシナトラの歌を歌う。

日生劇場の「プリシラ」(12月8日-29日)はオーストラリア・ミュージカル。1994年公開の映画がもと。3人のドラァグクイーンが、バスで砂漠を旅する道中記。男でありながら女装し性的差別を受ける場面は悲哀が滲み出る。「エリザベート」でルキーニを演じた山崎育三郎のドラァグクイーンが美しい。ほかに陣内孝則、ユナク、古屋敬多。懐かしいディスコミュージックが流れる。演出は宮本亜門。「キンキーブーツ」の日本人キャストと来日公演とドラァグクイーンがもてはやされる年であった。

トップ交代が早い宝塚歌劇団

宝塚歌劇団は2014年4月の100周年記念から2年たち、102期生が巣立った。観客動員は102%と好調。1年のラインアップは本公演が9作品だから東京宝塚劇場を例にとると明日海りお・花乃まりあの花組だけが「ME AND MY GIRL」(6月24日-7月31日)1本で終わるが17年1月は東京公演からスタートする。

月組は16年の正月公演(1月3日-2月14日)「舞音-MANON」(植田景子作・演出)から始まった。アベ・プレヴォの「マノン・レスコー」を20世紀初頭のインドシナに置き換えた。フランスの海軍将校(龍真咲)が妖艶な踊り子舞音(愛希れいか)に溺れてゆく。月組トップの龍真咲は、次の大野拓史作・演出「NOBUNAGA―下天の夢」(8月8日-9月4日)の織田信長役を最後に宝塚を卒業。新トップに決まったのは入団9年目の珠城りょう。研7でトップになった天海祐希以来のスピードトップの記録になる。珠城はフレンチ・ミュージカル「アーサー王伝説」(10月14日-19日、文京シビックホール)でプレお披露目をしたが、骨太で大柄、存在感がある。宝塚大劇場でのトップお披露目は、ブロードウェイ・ミュージカル「グランドホテル」(17年1月1日-30日)の男爵役だ。93年に月組トップの涼風真世が会計係のオットー・クリンゲライン役で退団したが、今回は男爵を主役に据えた新バージョンで上演する。日本初演の演出・振付を手掛けたトミー・チューンが、特別監修の役割で来日した。演出は岡田敬二・生田大和。ロシアのプリマバレリーナ、グルーシンスカヤを愛希れいかが演じる。

星組は、100周年記念公演の大役を果たした大物トップ柚希礼音退団後、15年5月、北翔海莉が専科からトップに就任した。16年はオペレッタの「こうもり」(5月13日-6月19日)を軽快に演じたのち、斎藤吉正作・演出「桜華に舞え」(10月21日-11月20日)の桐野利秋役で宝塚を卒業した。98年の初舞台で宝塚在籍年数は長かったが、トップ生活は1年半と短く、2番手の紅ゆずるにトップの座を譲った。トップ娘役の妃海風も同時退団した。紅の相手役は綺咲愛里。

雪組(4月1日-5月9日)は少年漫画「るろうに剣心」(小池修一郎脚本・演出)のミュージカル化。トップの早霧せいなが〝不殺〟を誓った剣客・緋村剣心で激しい立ち廻りを見せた。そして正塚晴彦作・演出「私立探偵ケイレブ・ハント」(11月25日-12月25日)で16年の宝塚を締めくくった。剣士と背広姿の颯爽とした現代青年という異なる役どころが、宝塚ならではの面白さである。11月に雪組トップの早霧せいな・咲妃みゆのトップコンビが、17年7月23日付で同時退団することが発表された。100周年後は、宝塚のトップ交代が早まり、若返りを進めているような感じがする。16年は退団者がトップを含めて38人にのぼる。

宙組の朝夏まなとは、「シェイクスピア」(2月19日-3月27日)主演後、宝塚初演20周年記念公演となる「エリザベート」(9月9日-10月16日)で、黄泉の帝王トートを演じた。宝塚では9演目のヒット作。これまでトートは銀髪姿が多かったが、朝夏トートはストレートの黒髪が異色だった。エリザベートは実咲凛音。小池修一郎潤色・演出に小柳奈穂子が新たに加わり、共同演出になった。

本公演以外では、KAAT神奈川芸術劇場の花組公演「For the people リンカーン自由を求めた男」(原田諒作・演出

3月4日-10日)に特別出演した轟悠のリンカーンが力強い存在感を示した。

宝塚OG出演に力を入れる梅田芸術劇場

宝塚を卒業したトップ男役のほとんど全員が女優として再スタートする。宝塚OGだけでブロードウェイ・ミュージカル「CHICAGO!」が2014年の宝塚100周年に上演されたが、梅田芸術劇場の制作である。16年には横浜で再演後、ニューヨークのリンカーンセンター・フェスティバルに参加。デビッド・H・コークシアターで7月20日-24日まで上演、帰国後、東京・大阪で凱旋公演が行われた。峰さを理・麻路さき・和央ようか・湖月わたる・水夏希・朝海ひかるら元男役トップを揃えた舞台は迫力があった。

100周年を支えた大物トップ柚希礼音の退団後初主演ミュージカルは「バイオハザード〜ヴォイス・オブ・ガイア」(G2脚本・演出)の女闘士リサ・マーチン。世界的人気を誇るサバイバルゲームの世界初のミュージカル化である。柚希は海宝直人、吉野圭吾、横田栄司、渡辺大輔らに囲まれ、世界を救うために必死に闘った。(9月30日-10月12日　赤坂ACTシアター、11月11日-16日　梅田芸術劇場)

1989年ブロードウェイで初演され、93年に宝塚版で日本初演した「グランドホテル」(ルーサー・ディヴィス脚本、ロバート・ライト&ジョージ・フォレスト作詞・作曲、モーリー・イエストン追加作詞・作曲)の男女混合版が英国のトム・サザーランドの新演出で注目された(4月9日-24日・赤坂ACTシアター)。ベルリンの豪華ホテルを舞台に余命わずかの会計士(中川晃教・成河)、スターを夢見るタイピスト(昆夏美・真野恵里菜)、貧しい男爵(宮原浩暢・伊礼彼方)と絶頂を極めたバレリーナ(安寿ミラ・草刈民代)らの人生が織りなす群像劇。死のダンサー(湖月わたる)が死と生を暗示する。サザーランド版の面白さはRED版が会計士の再生とホテルマン(藤岡正明)に赤ん坊が誕生して希望を持たせる普通版に対して、GREEN版は数年後のナチス迫害を暗示するラストが衝撃的な点だ。安寿ミラのバレリーナがクールでプリマの誇りと厳しい現実の落差を的確に表現した。重要な役どころを元宝塚トップが演じ、舞台を引き締めている。

08年に宝塚が日本初演した「スカーレット・ピンパーネル」(バロネス・オルツイ原作、ナン・ナイトン脚本・作詞、フランク・ワイルドホーン作曲、ガブリエル・バリー演出)の男女混合版で、宝塚時代に秘密組織ピンパーネル団のリーダー、パーシーを演じた安蘭けいが、パーシーの妻で女優のマルグリッド役に回った。パーシーは石丸幹二、革命全権大使ショーヴランに石井一孝。今回はブロードウェイ版をベースにした新版上演だった。(10月19日-26日　赤坂ACTシアター、10月30日-11月7日　梅田芸術劇場)

活躍広げるジャニーズ事務所

SMAP解散騒ぎなどどこ吹く風、帝劇を5カ月独占するジャニーズ事務所では、若手グループが続々誕生する。

1月は年末から続く2カ月公演「ジャニーズ・ワールド」(15年12月11日-16年1月27日)。エンターテインメント・ショーの集大成。堂本光一の「Endless SHOCK」(2月4日-3月31日)は17年目。ブロードウェイの大劇場進出が決まったコウイチ(堂本)と幼馴染みのヤラ(屋良朝幸)らの仲間たち。フライング、殺陣、階段落ちなど見せ場が多い。3月末で1422回となり、3006回の「レ・ミゼラブル」につぐ2位の記録になる。

ボクシングを題材にした「DREAM BOYS」(9月3日-30日)は玉森裕太、千賀健永、宮田俊哉のKis My Ft2が主演。ジャニー喜多川の最新作「ジャニーズ・オールスターズ・アイランド」(12月3日-17年1月24日)はKis My Ft2、Sexy zone、ABC-Zら全員が主役という賑やかな舞台だ。

日生劇場は9月(4日-28日)はSNOW Manらによる「少年たち」(松竹制作)10月(5日-27日)は「ABC-座2016株式会

社応援屋」と2カ月連続。シアタークリエは「ジャニーズ銀座２０１６」（4月29日－5月31日）、ふぉーゆー主演「縁〜むかしなじみ」（9月7日－25日）。新橋演舞場は、滝沢秀明主演「滝沢歌舞伎」（4月10日－5月15日）と大劇場での活躍が続く。

ジャニーズ事務所の若手が芝居やミュージカルに挑戦する東京グローブ座は、関ジャニ∞の村上信五の一人芝居（2月21日－3月13日）、ジャニーズウエストの濱田崇裕の初座長公演「歌喜劇・市場三郎」（4月22日－5月8日）、長野博は、川平慈英、松岡充、鈴木壮麻のオフ・ブロードウェイ・ミュージカル「フォーエヴァープラッド」（5月18日－30日）に単独参加し実力をつけている。

玉野和紀のオリジナル・ミュージカル「クロスハート」（12月9日－28日　ブルーシアター六本木）には中山優馬、屋良朝幸が主演した。

多彩なプロダクション制作

旺なつきは再演の「マレーネ」（2月10日－14日　俳優座劇場）でさらに演技に磨きがかかった。旺のライフワークになる作品である。

彩吹真央再演の「Ｅｎｄ　ｏｆ　ｔｈｅ　ＲＡＩＮＢＯＷ」（7月9日－24日　俳優座劇場）のジュディ・ガーランドも好評。「ピアフ」でヒットした大竹しのぶが、市村正親と「スウィーニー・トッド」（4月14日－5月8日　東京芸術劇場プレイハウス）を、石丸幹二は「ジキル＆ハイド」（3月5日－20日　東京国際フォーラムC）を再演し、持ち役になってきた。

10月の来日公演前に日本初演の「キンキーブーツ」（ハーヴェイ・ファイアスタイン脚本、シンディ・ローパー音楽・作詞、ジェリー・ミッチェル演出・振付、岸谷五朗上演台本）が全員よく演じていた。破産寸前の靴工場を継いだチャーリー（小池徹平）は、ドラァグクイーンのローラ（三浦春馬）の力を借りて、危険でセクシーなドラァグクイーンのためのブーツを作る決意をする。「心を開いて受け入れることで世界は変わる」というメッセージが伝わった。新国立劇場中劇場（7月21日－8月6日）は売り切れ。東急シアターオーブで凱旋公演（8月28日－9月4日）が行われた。

松竹制作の「狸御殿」は尾上松也主演、宮本亜門演出。東野圭吾原作「手紙」のミュージカル化が優れていた。

「ブラック・メリーポピンズ」「キム・ジョンウク探し」など韓国ミュージカル上演が増えたが、「ヴィンセント・ヴァン・ゴッホ」（チェ・ユソン作、ソヌ・ジョンア音楽）は、画家ゴッホと彼を支えた弟のテオの兄弟愛を描いた2人ミュージカル（9月7日－24日　紀伊國屋サザンシアター）。最新技術を駆使した鮮やかな映像を使用。ヴィンセントに橋本さとし、泉見洋平、野島直人、テオに岸祐二、上山竜治、入野自由のトリプル配役。

ホリプロ制作「ピーターパン」（7月24日－8月3日　東京国際フォーラムC）は、初演から36年目。フック船長に吉野圭吾が初参加し、演出（玉野和紀）も少しずつ変えている。日本ＴＶ制作の「アニー」（4月23日－5月9日、新国立劇場中劇場）は、初演から31年目。30年間で１６３万人が観劇し、アニー役は９０００人の中から選ばれた。

イッツフォーリーズは「創立40周年・いずみたくメモリアル25周年記念公演」を開催した（6月10日－19日　あうるすぽっと）。ミュージカル「Ｍｉｄｓｕｍｍｅｒ　Ｎｉｇｈｔ　Ｄｒｅａｍ」と「見上げてごらん夜の星を」を再演したほか、コンサート「イッツフォーリーズの原点」で数々のいずみたくの名曲が歌われた。

ミュージカル座は、黒人公民権運動を描いた「アイ・ハブ・ア・ドリーム」沖縄戦の悲劇を描いた「ひめゆり」などヒット作を生み出している。ブロードウェイ・ミュージカル「ブルックリン」（5月11日－15日）「スペリング・ビー」（12月7日－11日、いずれも六行会ホール）を初演して意欲を見せた。短期公演ながら1年間に18作品を上演。若手俳優も力をつけてきた。

多彩な海外からの来日公演

大作ミュージカルは3本。3度目の来日公演は「ドリーム・ガールズ」。黒人女性トリオのサクセスストーリー。恋と友情、反発と栄光と挫折の物語。ロバート・ロングボトムによる新演出版の来日公演(6月8日-26日)。

アンドリュー・ロイド＝ウェバーとティム・ライスが初めてタッグを組んだ「ヨセフと不思議なテクニカラー・ドリームコート」の新バージョンが初来日(7月13日-24日)。演出・振付は「ハミルトン」の振付でトニー賞を受賞したアンディ・ブランケンビューラー。以前の来日公演より色彩は淡彩になった。

「キンキーブーツ」の来日公演(10月5日-30日、いずれも東急シアターオーブ)は、すでに日本人キャストで上演済みのせいかわかりやすかった。ローラ役のJ・ハリソン・ジーは歴代で一番の長身とか。4インチのヒールのあるブーツ姿は迫力があった。

マシュー・ボーンの最新作「眠れる森の美女」(9月14日-25日、東急シアターオーブ)はエキサイティングな舞台だった。「バーン・ザ・フロア」(4月9日-13日　東急シアターオーブ)はおなじみ。南アフリカの「ドラムストラック」(8月17日-28日　天王洲銀河劇場)は9度目の来日公演である。

ミュージカルベスト10

2016年のミュージカル界の傾向を知る上で「ミュージカル」誌選出(評論家・ジャーナリスト26名)の「ミュージカル・ベストテン」が参考になる。

作品BEST10の第一位は、東宝製作・シアタークリエで日本初演された「ジャージー・ボーイズ」(演出　藤田俊太郎)に決まった。第二位以下は「ノートルダムの鐘」(劇団四季　演出　S・シュワルツ)「キンキーブーツ」(アミューズ・フジテレビ　演出　J・ミッチェル)「1789～バスティーユの恋人たち～」(東宝　演出　小池修一郎)「グランドホテル」(梅田芸術劇場　演出　T・サザーランド)「手紙」(ミュージカル「手紙」製作委員会　演出　藤田俊太郎)「For the People～リンカーン　自由を求めた男」(宝塚歌劇団　演出　原田諒)「るろうに剣心」(宝塚歌劇団　演出　小池修一郎)「Shakespeare～空に満つるは、尽きせぬ言の葉」(宝塚歌劇団　演出　生田大和)「ラディアント・ベイビー　～キース・ヘリングの生涯」(東宝・アミューズ　演出　岸谷五朗)

再演賞「ミス・サイゴン」(東宝　演出　L・コナー)

演出家賞　藤田俊太郎(「ジャージー・ボーイズ」「手紙」)

男優BEST10　第一位は「ジャージー・ボーイズ」「グランドホテル」ほかの中川晃教が選出された。第二位以下は三浦春馬(「キンキーブーツ」)市村正親(「ミス・サイゴン」「スウィーニー・トッド」)石丸幹二(「スカーレット・ピンパーネル」「ジキル&ハイド」)海宝直人(「ノートルダムの鐘」「ジャージー・ボーイズ」)井上芳雄(「エリザベート」ほか)小池徹平(「1789」「キンキーブーツ」)浦井健治(「王家の紋章」)成河(「グランドホテル」「エリザベート」)伊礼彼方(「グランドホテル」「王家の紋章」)第八位の浦井健治と成河は同票のため、第九位は欠番。

女優BEST10　第一位は「Tell Me on a Sunday」「王家の紋章」の濱田めぐみが選出された。第二位以下は花總まり(「エリザベート」「1789」)轟悠(「For the People」「双頭の鷲」)大竹しのぶ(「ピアフ」「スウィーニー・トッド」)ソニン(「1789」「キンキーブーツ」)早霧せいな(「るろうに剣心」「ローマの休日」他)北翔海莉(「桜華に舞え」「こうもり」ほか)キム・スハ(「ミス・サイゴン」)涼風真世(「貴婦人の訪問」「エリザベート」)岡村美南(「ノートルダムの鐘」ほか)

第八位のキム・スハと涼風真世同票のため第九位欠番。

2016年・地方演劇

森　洋三

熊本地震で劇場ホールに被害続出

二〇一六年四月、熊本地方は前震、本震の二度にわたる震度七、さらに二十回を超す震度六、五の地震に襲われた。益城町の大被害や国宝熊本城の天守閣、石垣の被害などがとりわけ大きく報道されて注目を集める一方で、その陰に隠れてしまった観があるものの、熊本県内の公立文化施設七十五館のうち熊本県立劇場や熊本市民会館など二十二館が大小さまざまな被害を受けていた。思い起こせば一一年三月の東日本大震災（東北地方太平洋沖地震）における東京の震度は五強・五弱だった。筆者は品川区立の地下ホールで観劇していて遭遇したが、これを上回る震度七が二回、六が五回という地震の恐ろしさ、脅威は想像に難くない。ほぼ二か月後の六月初旬、青年座劇場を観劇した際に配布された「熊本市民劇場に元気を届けよう！」という支援募金のメッセージを見て被害の一端を知った。

熊本地震の起きた四月、青年座は九州演劇鑑賞団体連絡会議（九演連）の統一例会で「からゆきさん」巡演中で、五～十日に熊本県立劇場演劇ホール（一一七二席）公演を終えて前震の十四日は福岡市のももちパレス昼公演の終演後の夜間に遭遇。同様の九演連例会で劇団東演は「検察官」を六月六～八日に熊本県立劇場公演を予定していたのが同劇場の損壊閉館で使用できず、八代市の八代ハーモニーホール（五〇〇席）と熊本市北区の植木文化ホール（六〇一席）に会場を移して上演した。九州へは前進座も十月中旬から「切られお富」を巡演したが、熊本県立劇場演劇ホールが八月下旬に営業再開したため三日間の公演を予定通りに行った。いずれも東京の劇団だが、地方演劇への浸透ぶりが熊本地震で改めてクローズアップされたように思えた。九演連は低迷を続ける演劇鑑賞団体の中でいま一番元気な組織だが、地震の影響で会員数が減少した地域が出ていると聞く。

落下物が観客不在の客席直撃

熊本県立劇場は外壁やコンサートホール（一八一〇席）の落下物で調光卓が破損、演劇ホールではコンクリート片や石膏ボードの一部破損などの被害を応急修理（本格復旧工事は未定）、八月下旬に使用可能となった。ただ熊本市民会館シアーズホーム夢ホール（一五九一席）はプロセニアム部材やシーリングスポット部材の客席落下など被害が大きく再開は一七年十二月以降、客席天井落下、照明器具破損、舞台・音響装置故障の火の君文化ホール（五九四席）や健軍文化ホール（二九三席）も一七年暮れまで再開できない状況だ。東日本大震災の教訓で東京の各劇場は避難誘導の告知が通例になっているが、先日、ある劇場で「この劇場は地震に安全なので万一の際はそのまま座席でお待ちください」というアナウンスがあった。だが熊本市民会館や健軍文化ホールの被害写真を見ると客席への落下物がすさまじい。不幸中の幸いというか震度七の地震が午後九時二十六分（前震）、午前一時二十五分（本震）という時間帯に起きたためどの劇場ホールとも観客への被害がなかったようであるが、巨大地震が上演中に起きた際に劇場や観客はどう対応すれば良いのか考えさせられた。

東京系カンパニーの歌手コンサート、ミュージカルなどに公演中止や延期が相次いだものの地方劇団の公演中止や延期は意外にも少なかった。被害甚大だった熊本市東部の健軍商店街にあるギャラリーＡＤＯではこけ

ら落とし公演になるはずの劇団仮面工房「未知らぬ夜の散歩人」が四月二十三・二十四日の公演を中止、また同ギャラリーで五月二十八・二十九日に予定していた大帝ポペ「ふたりは　ぼっちで」は公演を延期、アートサポートふくおかの「熊本地震被災地支援・実演団体の福岡公演サポート事業」の支援で福岡市の別会場で七月に公演。五月四～七日に熊本市中央区のスタジオｉｎ・Ｋ(四十席)で熊本の演劇ユニット・雨傘屋が上演を予定していた「青木さん家の奥さん」は公演中止に。前震のあった夜、名古屋の劇団少年王者舘主宰・天野天街を演出に迎え稽古初日の読み合わせ中の地震遭遇だったという。

宮崎県立芸術劇場「三文オペラ」が満員の観客を迎えて初日に公演中止

熊本地震に先立って九州演劇界を揺るがしたのはメディキット県民文化センター（宮崎県立芸術劇場）が演劇・時空の旅シリーズ第八回公演に取り上げたブレヒト作「三文オペラ」公演中止問題だ。十年にわたって同劇場演劇ディレクターを務める永山智行(三月末で退任。劇団こふく劇場代表)演出で二月五～七日に同センター演劇ホール、十三・十四日にいわき公演(いわき芸術文化交流館アリオス中劇場)、三月五・六日がＫＡＡＴ神奈川芸術劇場での上演を予定していたが、二月五日の公演初日、満員の観客に公演中止を伝えるという極めて異例の事態になった。その際、出演者全員が即興のライブパフォーマンスを行い、観客を楽しませたという。

「演劇・時空の旅シリーズ」は宮崎県立芸術劇場の自主制作公演として二〇〇八年にスタート、今回がシリーズ最終公演だった。古代ギリシャから現代まで世界の名作をガイドブックに時間と空間を旅しながら人類史をたどっていくシリーズでこれまでギリシャ「女の平和」、フランス「シラノ・ド・ベルジュラック」、ロシア「三人姉妹」、日本「日本人のへそ」などをいずれも永山ディレクターの構成演出で上演。出演者は九州各地の一線級俳優を集めて約一カ月のアーティスト・イン・レジデンス方式で作品を練り上げ、宮崎から県内外へ優れた演劇作品を発信しようという企画。出入り自由の公開稽古を毎日無料で行うなど地域文化への貢献も大きかった。「三文オペラ」はシリーズ初の本州ツアーになるはずだったが、当然のことながら福島、神奈川公演とも中止という事態を招いた。出演者は北九州・ブルーエゴナク、長崎・劇団ヒロシ軍、宮崎・劇団こふく劇場、福岡・14＋、北九州・超人気族、長崎・劇団ＨＩＴ！ＳＴＡＧＥ、宮崎・劇団25馬力、北九州在住の札幌・劇団千年王国栄田佳子、福岡出身の東京・劇団ＫＡＫＵＴＡ多田香織のほか三十四人の歌うエキストラと総勢で四十人を超える。

同劇場の説明によると一四年十月にドイツの著作権管理会社と上演契約を交わし上演権使用料を支払い済みなのに「楽譜通りの編成で生演奏を行う旨の契約条項違反。公演中止を」と公演初日に同社から通告された。一方、作者ブレヒト、音楽のクルト・ヴァイルの上演権を含む著作権の保護期間(死後五十年)がＪＡＳＲＡＣ(日本音楽著作権協会)のデータベースで確認したが保護期間は既に終了しているにもかかわらず上演権使用料を請求したことの疑義などに触れている。著作権の保護期間を日本は五十年(米英等の戦時加算約十年、映画は七十年)としているが欧米では七十年。同劇場はドイツの著作権を代行する日本の著作権事務所に質問書を出したが「ご質問にお答えできる立場にない。直接、ドイツにお問い合わせください」という回答だったと公表している。保護期間をどう解釈するのか筆者にはよく分からないが、宮崎県立芸術劇場は六月、保護期間の切れたパブリックドメインであるという見解をとり、時期未定だが再演すると発表した。今後の成り行きが大いに注目される。

揺れ動く地方演劇

一六年九月、名古屋の中日劇場がビル建て替えに伴い、一八年三月末に閉館することが発表された。新聞社(中日新聞)が直営する全国唯一の常設劇場、名古屋の中心・栄町に位置する中日劇場は六六年四月に開館、文学座

「華岡青洲の妻」初演や商業演劇、ミュージカル、宝塚歌劇、歌手公演、歌舞伎など幅広い路線で年間四十公演以上行い、中部地区の演劇文化振興に貢献している。名古屋地区は昭和四十年代から御園座、名鉄ホール、中日劇場の三大劇場が競い合ってきたが、名鉄ホールが〇七年から貸しホールとして運営、一五年三月に営業終了、老舗の御園座は紆余曲折を経ながらも四十五階建てマンションビル内の劇場として現在建て替え工事中(名古屋顔見世などは別会場を借りて興行)。中日劇場の閉館とバトンタッチの形で一八年四月にけら落とし興行を迎えるが「名古屋三座」時代は終焉、中部地区の大劇場は御園座一座になる。

一方、二つの有力劇団が存続の岐路に立つことになった。一つは六月に主宰者・松本雄吉が亡くなった維新派(大阪市)。独特のヂャンヂャン☆オペラスタイル、離島や海外で壮大な野外劇を生み出し評価の高い七〇年創立の劇団だが、劇団解散を決めた。松本への追悼の意を込めて未完の脚本を劇団員で構成、十月十四～二十四日に奈良の平城京跡地で最終公演として「アマハラ」を連日満員の盛況で打ち上げた。もう一つは八四年、倉本聰が私財を投じて北海道富良野市を拠点に俳優や脚本家育成のために立ち上げた受講料無料の富良野塾(一〇年四月に閉塾)卒業生による演劇ユニット「富良野ＧＲＯＵＰ」の活動終了だ。一六年も倉本の作・演出による「屋根」を一～三月に富良野市を皮切りに仙台、東京、京都、広島、愛媛、鹿児島など二十一会場ツアーを行ったが、一七年一～三月に倉本作品を中村龍史との共同演出による「走る」での全国十七会場ツアーが最終公演になるという。記者会見で倉本は高齢で「体が続かないので、これでおしまいに」と活動終了の意向を語っている。富良野塾からは二期生の山下澄人が一七年一月の第一五六回芥川賞を受賞、またツアー公演の盛況など大きな成果も生み出していただけに今後の成り行きが注目される。

今年も様々な演劇祭が各地で行われた。七月三十日～八月四日に海外二十三か国、地域二十五団体などが参集した規模の大きい「とやま世界こども舞台芸術祭２０１６」、日本・韓国・中国三ケ国持ち回りで継続、ことしは日本開催年で八月二十八日～十月十五日の期間に第二十三回「ＢｅＳｅＴｏ演劇祭」が恒例の富山県南砺市利賀村、鳥取市の鳥の劇場など鳥取県、初の会場となった新潟県のりゅーとぴあ(新潟市民芸術会館)の環日本海地域の国際協働として開かれた。また年々盛んになったシニア演劇は劇団四季の拠点となっている京都劇場(九四一席)企画として六月十三日から五日間の日程で「京都シニア演劇フェスティバル」が開催され、中高年ミュージカル劇団「発起塾」、高槻シニア劇団「恍惚一座」、アトリエ劇研シニア劇団「星組」、箕面市の「劇団すずしろ」、劇団大阪演劇大学「豊麗線」、特別企画「木津川計の一人語り劇場」がそれぞれ参加、熟年パワーで客席を沸かせた。少し変わった話題を集めたのが富山を代表するアマチュア劇団・文芸座(小泉博代表)の南極公演だろう。同劇団はこれまでも海外公演を積極的に取り組んでいるが十二月二十日、チェーホフ劇の東北版「結婚の申込」を民間ベースキャンプ、ユニオン・グレーシア基地でツアー観光客を対象に上演。これは世界初の南極演劇公演になるという。

最後に各地で長い歴史を持つ地域劇団の活動を中心として恣意的に総括してみた。

［上半期］(一月)二十二～二十四日、不思議少年(熊本市)が北九州芸術劇場で「いいひと」(大迫旭洋作・演出)を、二十三・二十四日、二十九～三十一日、劇団四紀会(神戸市)が同劇団の元町プチシアターで「Ｒａｄｉｏ Ｍａｇｉｃ２」(森卓也、吉田業ほか作、村井伸二演出)を上演。(二月)五～七日、劇団せすん(大阪市)が大阪グリーン会館で創立五十周年記念公演「現在でもニッポン二十一世紀五分前」(飴谷隆治作、本多英二、杉田満、田坪文一演出)を、十一・十二日、劇団どろ(神戸市)が同劇団アトリエで「トイレはこちら」(別役実作、伊藤侑美演出)を、二十七・二十八日、演劇集団和歌山(和歌山市)が和歌の浦

アートキューブで創立四十五周年記念公演「変幻の海〜源平の争乱と熊野水軍」(楠本幸男作、山入桂吾演出)をそれぞれ上演。(三月)四・五日、劇団息吹(東大阪市)が東大阪市男女共同参画センター・イコーラムホールで「闇に咲く花」(井上ひさし作、坂手日登美演出)を、二十・二十一日、劇団上野市民劇場(三重・上野市)があやま文化センターで「美しきめまい」(芳地隆介作、杉森正美演出)を上演。

(四月)十六〜十八日、二十三・二十四日、劇団四紀会(神戸市)が同劇団元町プチシアターで「カミサマの恋」(畑澤聖悟作、岸本敏朗演出)を上演。(五月)四・五日、群馬中芸(群馬・前橋市)があかぎ未来スタジオで「やまなし・どんぐりと山猫〜イーハトーヴォものがたり」(宮沢賢治作、中村欽一台本・演出)を。二十一日、劇団静芸(静岡市)が劇団RIN・TPSスタジオとの合同公演として静岡市民文化会館中ホールで「そして誰もいなくなった」(アガサ・クリスティ原作、中村和光脚色、中川正臣演出)を上演。二十二日、NPO法人いわてアートサポートセンター(岩手・盛岡市)が岩手町スポーツ文化センター森のアリーナ(二十五日・岩手県民会館大ホール、二十六日・鹿角市コモッセ文化ホール、二十八日・宮古市民文化会館大ホール、六月一〜五日に東京の座・高円寺も)で「残花〜1945・さくら隊園井恵子」(上田次郎原案、詩森ろば作・演出)を。(六月)三〜五日、十〜十二日、劇団大阪(大阪市)が同劇団谷町劇場で大阪春の演劇まつり参加で「漠のゆりかご」(青木豪作、岡田力演出)を、四・五日、岡崎演劇集団(愛知・岡崎市)が同市せきれいホールで「兄おとうと」(井上ひさし作、神谷浩演出)を上演。十八・十九日、劇団きづがわ(大阪市)がリバティおおさかホールで「追憶のアリラン」(古川健作、林田時夫演出)を、十七・十八日、劇団名古屋(名古屋市)が同市熱田文化小劇場で「YABAI〜第三帝国の恐怖と貧困より」(ブレヒト原作、久保田明構成・演出)を。十八・十九日、二十四〜二十六日、劇団はぐるま(岐阜市)が御浪町ホールで「祭りよ、今宵だけは哀しげに〜銀河鉄道と夜」(加藤純・清水洋史作、汲田正子演出)を、二十四〜二十六日、七月一〜三日、劇団未来(大阪市)が劇団ワークスタジオで第百三十回公演「その頬、熱線に焼かれ」(古川健作、しまよしみち演出)を、二十六日、劇団やまなみ(山梨・北杜市)が笛吹市スコレーセンターで創立六十周年記念公演として「すてきな5人の淑女たち」(河野通方脚本、久保勝演出)をそれぞれ上演。

[下半期](七月)一・二日、劇団支木(青森市)が劇団アトリエで「役立たずは笑う」(哲観作・演出)を、一〜三日、劇団せすん(大阪市)が大阪グリーン会館で創立五十周年記念「翼」(さいふうめい作、田坪文一演出)を。八〜十日、劇団どろ(神戸市)が劇団アトリエで「例外と原則」(ブレヒト作、八木浩訳、合田幸平演出)を、十六日、劇団コーロ(大阪市)が京都ノースホール(十一月二十七日・明石市民会館中ホールも)で「天満のとらやん」(かたおかしろう作、茂山千之丞演出)。二十三・二十四日、京浜協同劇団(川崎市)が川崎市多摩市民館で四劇団合同公演「ブンナよ、木からおりてこい」(水上勉原作、小松幹生脚本、小山祐嗣演出)を、二十三・二十四日、劇団すがお(三重・桑名市)が桑名市スター21で「象の死」(斉藤瑞穂作、石垣まさし演出)を上演。(八月)五・六日、劇団ドラマシアターども(北海道江別市)がシアターどもⅣで創立三十五周年記念公演「未知なる遭遇館物語〜おばけちゃん」(ども作・演出)を、十八〜二十一日、関西芸術座(大阪市)がシアトリカル應典院で「ハツカネズミと人間」(ジョン・スタインベック作、亀井賢二訳・演出)、二十四日、劇団シアター生駒(奈良・生駒市)が生駒市はばたきホールで「夏の夜の夢」(シェークスピア作、菊川徳之助演出)を。二十六〜二十八日、劇団かすがい(兵庫・尼崎市)がコミュニティシアターAQで一堂和緒演出の朗読「雪女」(奥村和巳作)「八郎」(斉藤隆介作)「くりから御殿」(宮部みゆき作)を上演。二十九日〜九月四日、一五年夏に二劇団合同で異例の一カ月長期公演(三十一ステージ)を成功させたギンギラ太陽'S×劇団ショーマンシップ

（いずれも福岡市）が「奪われた手紙〜民間検閲局」（生田晃二・大塚ムネト脚本、大塚・仲谷一志演出）を上演。（九月）十六日〜十二月十三日、ＮＰＯ法人劇団道化（福岡・大宰府市）が福岡行橋市・鹿児島甑島・徳之島ツアーで「知覧・青春〜アイ・アム・ヒアー」、（中村芳子・篠崎省吾作、永井寛孝演出）を、十八日（十月二・十六日、十一月六日も）、創立五十周年を迎えたＮＰＯ法人あしぶえ（島根・松江市）がしいの実シアターで英・日本語「セロ弾きのゴーシュ」（宮沢賢治原作、園山土筆演出、八木謙人英語台本）を上演。

（十月）八日、仙台小劇場（仙台市）が東北大学萩ホール（十八・十九日に北京、二十一日に紹興公演も）で「遠い火〜仙台における魯迅」（石垣政裕作・演出）を、八・九日、劇団演集（名古屋市）が名古屋東文化小劇場で「二階の女」（獅子文六作、飯沢匡脚本、土屋たかし演出）を。九日、劇団上野市民劇場（三重・伊賀市）が伊賀市文化会館さまざまホールで創立六十五周年記念公演「おやじの明日」（北泉優子作、杉森正美演出）を、二十二・二十三日、劇団海鳴り（北海道紋別市）が紋別市民会館で創立五十周年記念公演として「満月の旅立ち」（いがらしようこ作、五十嵐陽子演出）を、二十八〜三十日、劇団はぐるま（岐阜市）が岐阜市文化センター小劇場でロックミュージカル「空を翔ぼうとしたニワトリたち」（朴養浩原作、なみ悟朗台本・演出）をそれぞれ上演。（十一月）五日、劇団からっかぜ（静岡・浜松市）が浜松市福祉交流センターホール（九月二十四・二十五日、十月二十二・二十三日に劇団アトリエ公演も）で「闇に咲く花」（井上ひさし作、布施佑一郎演出）を。十一・十二日、劇団支木（青森市）がアウガＡＶ多機能ホールで「病は気から」（田辺典忠作・演出）、十一〜十三日、劇団大阪（大阪市）が一心寺シアター倶楽で劇フェス参加の「夜明け前のカチャーシー」（寺島アキ子作、熊本一演出）、十八〜二十日、二十五〜二十七日、劇団かすがい（兵庫・尼崎市）がコミュニティシアターＡＱで「界境に踊る」（石原燃作、門田裕演出）を上演。十九・二十日、劇団名古屋（名古屋市）がアトリエ☆７５８で「紙屋悦子の青春」（松田正隆作、久保田明演出）を、二十五〜二十七日、十二月二〜四日、劇団未来（大阪市）が同劇団ワークスタジオで劇フェス参加の「夕空晴れて」（ふたくちつよし作、森本景文演出）を。二十六・二十七日、劇団弘演（弘前市）が弘前市文化センター大ホールで「かあちゃん」（山本周五郎原作、秋本博子脚色・演出）。（十二月）二〜四日、関西芸術座（大阪市）がＡＢＣ会館ホールで劇フェス参加の「しあわせの王子」（オスカー・ワイルド作、勇來佳加脚色、松本昇三演出）を上演。三・四日、劇団名古屋（名古屋市）がアトリエ☆７５８で「親愛なる我が総統」（古川健作、久保田明演出）を、二〜四日、九〜十一日、京浜協同劇団（川崎市）が第九十回記念公演としてスペース京浜で「めくらぶんど」（河村光夫作、藤井康雄演出）、「嬰児殺し」（山本有三作、和田庸子演出）の二本立て上演。三・四日、劇団名芸（名古屋市）が同劇団稽古場で「かさじぞうさん」（栗木英章脚本、近藤亜由美演出）を。九〜十一日、劇団よこはま壱座（横浜市）が神奈川県立青少年センターで「藪原検校」（井上ひさし作、濱田重行演出）、二十三・二十四日、劇団きづがわ（大阪市）がリバティおおさかホールで大阪・劇フェス参加の「追憶のアリラン」（古川健作、林田時夫演出）を、二十五日、劇団やまなみ（山梨・北杜市）が山梨県立文学館講堂で創立六十周年記念公演第二弾として「五月の陽光」（楠本幸雄原作、河野通方脚本、久保勝演出）を上演。

二〇一六年・テレビドラマの回顧

鈴木嘉一

ブームを起こした「あさが来た」

二〇一六年も、NHKの朝の連続テレビ小説（朝ドラ）の好調が続いた。ビデオリサーチの調べ（関東地区）によると、年間の高視聴率番組ベスト30のうちドラマは五本を数えるが、朝ドラが三本を占めた。

一五年度後期の「あさが来た」（大森美香脚本）は、ブームを巻き起こした。モデルは、明治から大正にかけて炭鉱や生命保険会社を経営し、女子教育にも尽力した大阪の実業家・広岡浅子である。思い立ったらすぐ突っ走り、封建社会を引きずる男社会に立ち向かうヒロインあさを、波瑠がはつらつと演じた。

最終回の視聴率は二七・〇％に達し、平均視聴率は二〇〇一年以降の朝ドラで最高の二三・五％を記録した。AKB48が歌った主題歌「365日の紙飛行機」も、ヒットを飛ばした。「東京ドラマアウォード2016」では、連続ドラマ部門のグランプリのほか、波瑠が主演女優賞、五代友厚役で売り出したディーン・フジオカが助演男優賞に輝いた。波瑠はこの後、日本テレビの「世界一難しい恋」で大野智と共演したのに続いて、フジテレビ系（関西テレビ制作）の「ON　異常犯罪捜査官・藤堂比奈子」に主演したように、活躍が目立った。

一六年度前期の「とと姉ちゃん」（西田征史脚本）は激動の昭和を背景にして、戦後に個性的な雑誌「暮しの手帖」を創刊した大橋鎮子をモデルとし、高畑充希が主演した。大橋とコンビを組んだ花森安治を思わせる名編集長の花山には、唐沢寿明がふんした。主人公の小橋常子は早世した「とと（父親）」の代わりに、おっとりした母と二人の妹との生活を支えるため、「職業婦人」としての道を切り開く。「あさが来た」に通じる行動的なヒロインで、視聴率でも最高二五・九％、平均二二・八％と「あさが来た」に迫る勢いだった。宇多田ヒカルの主題歌「花束を君に」もヒットした。

十月に始まった渡辺千穂脚本の「べっぴんさん」も、二〇％を超える視聴率をキープしている。神戸市を拠点とする子供服中心のアパレルメーカーの創業者の一人、坂野惇子をモデルとする。芳根京子が演じる坂東すみれは子育てをしながら、仲間たちと子供服専門店を開き、成功するというサクセスストーリーである。ただし、すみれは「あさが来た」や「とと姉ちゃん」のヒロインのように先頭に立ち、周囲を引っ張っていくタイプではない。芯は強いが、何かにつけて控え目で、周囲との協調性を重んじながら着実に進むキャラクターが、新鮮に映る。

実在の人物をモデルとする半生記路線は朝ドラの本流だが、企業の創業者をモデルとする作品が続き、支持されているのはなぜか。その分野のパイオニアたちだけに劇的な要素が多く、ドラマの骨格やストーリーの展開もわかりやすい。関連本が出回り、主人公ゆかりの地や会社が脚光を浴びるといった波及効果、相乗作用も見込まれるからだろう。その一方では、「結果的に企業の宣伝につながるのではないか」という指摘がなくもない。

「真田丸」で大河ドラマの人気回復

NHKのもう一つの看板番組である大河ドラマはどうだったか。一五年の「花燃ゆ」の平均視聴率は一二・〇％と史上最低を記録したが、人気脚本家の三谷幸喜が「新選組！」（二〇〇四年）以来満を持して執筆した「真田丸」は、最高で二〇・一％、平均で一六・六％と人気を回復するだけではなく、内容面でも好評だった。

注目されるのは、日曜の午後六時から先行放送されるBSプレミアムで平均四・七％という異例の高視聴率を取ったことである。クライマックスの大坂の陣を描く終盤では、五％台を連発した。総合テレビでの放送を待ちきれないファンの間で「早丸」という新語が生まれた。

名将として名高い真田信繁（幸村）は「大河ドラマの主役に取り上げられていない戦国時代最後のヒーロー」と言えるかもしれない。三谷自身、「ずっと手付かずだったことに感謝したい」と語ったほどで、ご当地の長野県上田市はもとより、待望論は多かっただろう。

三谷とチーフ演出の木村隆文らは、大河ドラマの〝定番〟的な戦国時代の描き方をことごとく排した。まず主人公の子役を使わず、初回から主演の堺雅人が登場した。「真田家の人々が見聞きした出来事に絞って描く」という視点を貫き、本能寺の変や関ヶ原の合戦はナレーションなどで済ませた。

視聴者を驚かせたのは、大坂冬の陣で出城を築く回だった。最後に「名前はどうしましょう」と問われた信繁が「もちろん真田丸よ」と答えた瞬間、テーマ曲とタイトルバックが流れ、インターネットなどで評判となった。バイオリンのソロから始まるテーマ曲自体も、異例中の異例だった。

前半では、草刈正雄が真田昌幸役で圧倒的な存在感を示した。領地を守るため、知略の限りを尽くして上杉、北条、徳川勢と渡り合い、戦国の世を生き抜くしたたかさを見せつけた。豊臣秀吉（小日向文世）や徳川家康（内野聖陽）の描き方も、パターン化を打破する工夫がうかがえた。ラグビーのボールのように話がどう転がっていくか読めないスリリングな会話劇は、三谷流の作劇術の真骨頂だった。重厚な歴史ドラマ路線の大河ドラマはややもすると、笑いの要素が乏しかったが、喜劇を得意とする三谷はほどよいユーモアをまぶし、毎回、クスリとさせられる会話やシーンを盛り込んだ。「真田丸」は大河ドラマを革新したと評したい。

「逃げ恥」のヒットと総合視聴率導入

民放の連続ドラマでは、四シリーズ目となるテレビ朝日の「ドクターX 外科医・大門未知子」（十～十二月放送）が相変わらず強く、最高視聴率は二四・三％、平均でも二〇％を超えた。主演の米倉涼子、西田敏行、岸部一徳らのほか、泉ピン子、吉田鋼太郎、草刈民代らが新たに出演し、パワーを維持した。

TBSで同じ時期に放送された「逃げるは恥だが役に立つ」も、ヒットを飛ばした。派遣切りで仕事をなくした森山みくり（新垣結衣）が、恋愛経験のない三十代半ばのサラリーマン津崎平匡（ひらまさ）（星野源）と出会う。みくりが家事を代行する〝契約結婚〟をし、次第にひかれ合うという海野つなみの同名漫画をドラマ化した。

さまざまな社会問題も織り込んだこのラブコメディーは、「逃げ恥」と略称された。なかなか進展しない二人の関係について、「ムズムズしながらも、胸がキュンとなる」という意味の「ムズキュン」がネット上で広まった。毎回、エンディングで星野が歌う主題歌「恋」に合わせて、新垣らの出演者が踊るキュートな「恋ダンス」も、大きな話題を呼んだ。自分たちが踊る映像を動画投稿サイトにアップするファンが続出し、社会現象になった。

視聴率は一〇・二％でスタートしてから右肩上がりを続け、最終回は二〇・八％に達した。このヒットは、恋愛対象がいない男女の増加や晩婚化という社会風潮を取り上げた着眼の良さと、ネットでの話題の拡散が大きいだろう。ドラマは今でも、「テレビ離れ」が指摘される若い世代の心をとらえられることを実証した。

これまで述べてきた「視聴率」とは正確に言えば、リアルタイムでその番組の局にチャンネルを合わせている世帯の割合（世帯視聴率）を指すが、録画・再生による「タイムシフト視聴」が広がり、視聴実態との乖離（かいり）が以前から指摘されていた。特に、リアルタイムでの視聴が主流になるスポーツ中継や報道・情報番組、バラエティー系の番組に比べて、ドラマやアニメなどは世帯視聴率の低落傾向が著しかった。

そこで、ビデオリサーチは十月、関東地区での調査対象を六百世帯から九百世帯に拡大し、録画を一週間以内に再生した割合（タイムシフト視聴率）の測定に乗り出した。従来の（リアルタイム）視聴率にタイムシフト視聴率を足し、重複分を除いた「総合視聴率」という新たな指標を設定した。

調査開始の一か月間、タイムシフト視聴率のベストテンはドラマで占められた。トップは「逃げ恥」（十月二十五日放送）の一三・七％で、リアルタイム視聴率（一二・五％）よりも高かった。総合視聴率はこの時点でも二三・四％と、二〇％の大台を超えていた。タイムシフト視聴率が三位（九・五％）の「ドクターX」は、総合視聴率でトップ（二八・五％）に立った。

総合視聴率の導入はテレビドラマの価値を高める半面、タイムシフト視聴には民放経営の根幹であるCMを早送りされるリスクもつきまとう。NHKや制作陣はともかく、民放各局はそう喜んでばかりもいられない。

女性が主役の「お仕事ドラマ」

一六年も、働く女性を主人公に据えた「お仕事ドラマ」が一定の支持を受け、女性脚本家たちの活躍が目立った。

「ハケンの品格」や「花咲舞が黙ってない」などでこの路線を確立してきたのは、日本テレビの「水曜ドラマ」である。ベテランの大石静はこの枠で「家売るオンナ」（七～九月）を執筆し、好視聴率を挙げた。中堅不動産会社の営業所に、「私に売れない家はありません」と豪語する三軒家万智（北川景子）が異動してきた。けっして笑顔を見せず、部下に「GO！」と命じる時、長い髪が風に揺れるように、猪股隆一らの演出陣はオーバーと思えるほどコミカルな描写に徹した。日常的なリアリズムを軽々と超え、ヒロインの特異な能力と反時代的なキャラクターを際立たせた。

家を売り買いする家族は、共働き夫婦の子育て、引きこもり、不倫といった問題や悩みを抱えている。現代的な題材を一話完結で取り上げ、時には強引とも思える万智の手腕で、思いがけない解決策が示される。誰にもはっきりものを言う一見過激で、痛快な言動には、事なかれ主義に流されやすい今の風潮に対する作者の批評精神が込められていた。

大石はこれに先立ち、NHKの「コントレール～罪と恋～」（四～六月）も手がけた。通り魔事件で夫を失った妻（石田ゆり子）と、事件の現場に遭遇し、誤ってその夫を殺してしまった弁護士（井浦新）の運命的な出会い、許されざる大人の恋の行方を追った。「家売るオンナ」とは対照的な作風である。人気漫画のドラマ化が多い中、いずれもオリジナルという点に大石の作家性と円熟味を感じさせた。

「家売るオンナ」の後を受けた石原さとみ主演の「地味にスゴイ！ 校閲ガール・河野悦子」も、出版社の校閲部という裏方的な仕事を取り上げた点が新鮮だった。ファッション雑誌の編集者にあこがれるヒロインは、不本意な部署に配属された。物おじしない言動で人気作家らの間違いを指摘するように、ひたむきに奮闘する姿をコミカルに描いた。日替わりの派手なファッションや言葉の意味を示すテロップの多用など、若い女性層に向けてさまざまな工夫が凝らされた。

TBSの「重版出来！」（四～六月）は、演技力で定評のある若手女優の黒木華が漫画雑誌の新米編集者にふんした。オダギリジョーや松重豊、小日向文世らの芸達者に囲まれて、体育会系の熱血ウーマンを演じ、新たな境地を開拓した。原作は松田奈緒子の同名漫画だが、脚色の野木亜紀子は東京ドラマアウォードの脚本賞を受け、「逃げ恥」も担当した。また、この二作の演出陣に加わったTBSの土井裕泰も、この賞で演出賞を受けた。

フジテレビの「営業部長　吉良奈津子」（七～九月）は、社会性の強い題材を取り上げる井上由美子らしい脚本だった。広告会社の敏腕クリエイティブディレクター（松嶋菜々子）が育児休暇を経て復帰すると、畑違いの営業部門の管理職を命じられる。仕事と家庭、育児を両立させる苦労は、働く女性が増えた現代社会にあってすぐれて今日的なテーマである。

ＮＨＫの土曜ドラマ「トットてれび」（四～六月）も、「お仕事ドラマ」と言えなくもない。テレビ放送開始とほぼ同時にＮＨＫ専属女優となった黒柳徹子の自伝的エッセーを基にして、脚本・中園ミホ、演出・井上剛がドラマ化した。満島ひかりが若き日の黒柳をほうふつとさせ、渥美清（中村獅童）や森繁久彌（吉田鋼太郎）、向田邦子（ミムラ）らが実名で登場した。生放送時代の珍談奇談を通して、テレビ草創期の熱気が伝わってきた。

このほかの話題作に触れると、フジテレビの「月九」（月曜夜九時）で放送された「いつかこの恋を思い出してきっと泣いてしまう」（一～三月）は、厳しい格差社会の現実を背景にして、若い男女（高良健吾と有村架純）の恋愛を描く坂元裕二脚本の異色作だった。視聴率はそれほど高くなかったが、若い世代に支持された。同時期にＴＢＳで放送された「わたしを離さないで」は英国在住の作家カズオ・イシグロの小説を基に、臓器提供の宿命を背負わされた男女（綾瀬はるか、水川あさみ、三浦春馬）の愛と苦悩をシリアスに描いた。

宮藤官九郎の脚本による日本テレビの「ゆとりですがなにか」（四～六月）は、「ゆとり教育の第一世代」とされる男性三人（岡田将生、松坂桃李、柳楽優弥）が社会に出て、苦闘する姿をコミカルに描き、同世代の共感を誘った。

「昼ドラ」（昼の帯ドラマ）と言えば、主婦層に向けた「ドロドロの愛憎劇」というイメージが強い。最後に残った「昼ドラ」を制作してきた東海テレビ（フジテレビ系）のドラマ枠が三月末、半世紀を超える歴史に幕を閉じた。横山めぐみふんするヒロインが浮気をする夫への嫌がらせのため、〝たわしコロッケ〟を皿に盛りつける描写などが話題を呼んだ中島丈博脚本の「真珠夫人」や「牡丹と薔薇」などがヒットしたが、生の情報番組が主流になったことなどから、視聴率は低落傾向をたどった。佐藤江梨子主演の「嵐の涙」が最後を飾った。

ＷＯＷＯＷが「沈まぬ太陽」初ドラマ化

ＷＯＷＯＷが五月から放送した「沈まぬ太陽」（脚本・前川洋一、監督・水谷俊之、鈴木浩介）は、一九八五年の日航ジャンボ機墜落事故に想を得た社会派作家山崎豊子の代表作を初めてドラマ化した。開局二十五周年記念と銘打たれたように、同局で最長となる二十回の放送回数といい、アフリカや中東でのロケといい、スケールの大きな意欲作だった。主演は、ＮＨＫがヒットさせた山崎原作の「大地の子」（九五年）で鮮烈なデビューを飾った上川隆也。自らの信念を貫き、巨大組織の不条理と闘う男を演じるのにふさわしい年齢を迎えた。

主人公の恩地は高度成長期の六〇年代前半、航空会社の労働組合委員長として、労働環境の改善を求めて初のストを決行した。退任後、露骨な報復人事でパキスタンに飛ばされた。「二年で本社に戻す」という約束をほごにされ、今度はテヘランに左遷される。上昇志向の強い元労組副委員長役の渡部篤郎、老かいな労務担当役員の國村隼らのほか、平幹二朗、古谷一行、橋爪功、長塚京三、檀れい、夏川結衣、若村麻由美らが脇を固める豪華な配役で、骨太な群像劇となった。後半は墜落事故とその後の会社再建をめぐって、政官財界の思惑が入り乱れた。連続ドラマの強みを生かし、主人公と幹部や同僚との対立、葛藤だけではなく、仕事と家庭生活をどう両立させるかという側面もきめ細かく描かれ、見応えがあった。東京ドラマアウォードの優秀賞を受けたのもうなずける。

「大河ファンタジー」と冠されたＮＨＫの「精霊の守り人」も、大作と呼ぶにふさわしい。放送九十年を記念して、三年がかりで全二十二回を放送する。上橋菜穂子のファンタジー小説「守り人」シリーズが原作で、「精霊の守り人」は第一作のタイトルである。

シーズン１は三、四月、四週連続で放送された。主人公の女用心棒バルサ（綾瀬はるか）が新ヨゴ国の王子チャグムの命を救い、王宮からの刺客と戦う姿を描く。見どころは激しい殺陣と、最新の映像技術を駆使したスケールの大きな映像の世界である。大森寿美男が脚色し、片岡敬司が演出した。シーズン２の「悲しき破壊神」は二〇一七年一月から放送が始まった。

十二月に四夜連続で放送されたNHKスペシャル「ドラマ　東京裁判」は、戦後の「極東軍事裁判（東京裁判）」で日本の戦争指導者を戦犯として裁くため各国から集まった判事と、二年半に及んだ裁判の舞台裏を描いた。判事たちが残した手紙や日記、関係者への取材を基にして、カナダ、オランダと共同制作した力作だった。

「鬼平犯科帳」シリーズが終了

連続時代劇の孤塁を守るNHKの「ちかえもん」（一～三月）は、近松門左衛門の代表作の人形浄瑠璃「曽根崎心中」を題材にした〝虚実皮膜〟の異色作である。スランプに陥った近松（松尾スズキ）と天衣無縫の渡世人（青木崇高）が巻き起こす騒動をコミカルに描く。近松がモノローグで現代の流行歌の替え歌を口ずさんだり、紙芝居風のアニメが挿入されたりと、時代劇の約束事にとらわれない梶原登城らの演出も目を引いた。文化庁芸術祭優秀賞を受け、藤本有紀はこの脚本で向田邦子賞に輝いた。

この「木曜時代劇」は赤川次郎原作、滝沢秀明主演の「鼠、江戸を疾る2」を最後に終了し、四月の番組改編で三十五分間の「土曜時代劇」が新設された。第一弾はBSプレミアムで放送された「一路」の再編集版で、九月からは諸田玲子原作の「忠臣蔵の恋～四十八人目の忠臣～」（全二十回）が放送されている。第一部は、赤穂藩浅野家の江戸屋敷に仕えるヒロインきよ（武井咲）と四十七士の一人、磯貝十郎左衛門（福士誠治）の恋を吉良邸討ち入りに絡めた。第二部では、江戸城の大奥に入ったきよが将軍の側室となり、浅野家の再興に努める。

フジテレビでは、一九八九年から続いてきた中村吉右衛門主演の「鬼平犯科帳」が十二月二、三日放送の「THE　FINAL」前後編で惜しまれながら終了した。九シリーズ計百三十八回が放送され、二〇〇五年からはスペシャル編が十三本作られた。池波正太郎の代表作で、火付盗賊改方長官の長谷川平蔵の活躍を描く。酸いも甘いもかみ分けた鬼平を演じ続けた吉右衛門にとっては、舞台でも上演される当たり役となった。

連続時代劇が途絶えていた民放で、テレビ東京の「石川五右衛門」はゴールデンタイムで放送される久々の連続時代劇となった。市川海老蔵が連続ドラマに主演するのは、二〇〇三年のNHK大河ドラマ「武蔵　MUSASHI」以来。稀代の大泥棒をけれんみたっぷりに演じ、國村隼、比嘉愛未、榎木孝明らが共演した。テレビ東京では八年ぶりの連続時代劇復活だったが、これが十月から十二月まで放送された後、金曜夜八時台はまた現代劇に戻った。

テレビ東京は毎年一月二日、長時間の時代劇を売り物にしてきた。局のチャンネル番号だった「12チャンネル」にちなんで「12時間ドラマ」を二〇〇〇年まで放送し、人気を集めてきた。しかし、時代劇の退潮で翌年から十時間、一〇年から七時間、一四年から五時間へと段階的に短縮された。一六年には三時間に短縮され、東山紀之主演の「信長燃ゆ」が放送されたが、視聴率は四・七％と振るわなかった。このため、新春恒例の時代劇はこの年で終止符を打った。

一方、BSジャパンは一五年四月から、火曜夜九時台に一話完結形式の時代劇を編成している。第一弾の「松本清張ミステリー時代劇」に続いて、「山本周五郎人情時代劇」、直木賞作家の多岐川恭作品を原作とする「男と女のミステリー時代劇」を放送してきた。一六年十月には第四弾として横溝正史原作、要潤主演の「人形佐七捕物帳」が登場した。

また、有料放送の日本映画放送が運営する時代劇専門チャンネルは時代劇の衰退に危機感を抱き、一〇年から池波正太郎原作の「鬼平外伝」シリーズを制作してきた。スカパー！やBSフジ、ケーブテレビ大手のジェイコムなどと組んで制作費を分担する方式で、松平健主演の「顔」などを放送した。

芸術祭賞大賞は「奇跡の人」

単発作品やミニシリーズでは、NHKのBSプレミアムで放送された「奇跡の人」（全八回）が芸術祭大賞に選ばれた。ヘレン・ケ

ラーとサリバン先生の有名なエピソードをモチーフにして、脚本・岡田惠和、演出・狩山俊輔、主演・峯田和伸が「奇跡の人」を現代によみがえらせた。

一四年に放送され、芸術祭大賞を受賞した「時は立ちどまらない」に続いて、脚本・山田太一、演出・堀川とんこうのコンビが、再び東日本大震災と真正面から取り組んだ。前作と同じテレビ朝日で十一月に放送された「五年目のひとり」は、震災で家族を失った中年男(渡辺謙)を主人公にして、五年たってもそう簡単には癒されない被災者の心の傷を掘り下げ、芸術祭優秀賞を受けた。「忘れないと生きていけない。でも、忘れられない」という主人公のつぶやきが心に響いた。

良質のドラマを作り続けるWOWOWも気を吐き、「この街の命に」(緒方明監督)が芸術祭優秀賞や日本民間放送連盟賞の最優秀、東京ドラマアウォード優秀賞に選ばれた。動物愛護センターに配属された獣医(加瀬亮)や所長(田中裕子)たちを通して、飼い主の勝手で捨てられた犬や猫の命を見つめる社会派ドラマだった。

ベテラン脚本家では、池端俊策がNHKで力量を発揮した。終戦関連番組の「百合子さんの絵本〜陸軍武官・小野寺夫妻の戦争〜」は、ストックホルムで諜報活動に当たった小野寺信大佐(香川照之)とその妻(薬師丸ひろ子)を主人公にして、正確なヨーロッパ情勢を本国に打電しながらも、参謀本部によって握りつぶされてしまう苦悩を描いた。

これに続いて放送された土曜ドラマ「夏目漱石の妻」(全四回)は、妻の視点から文豪の実像に迫る秀作だった。神経質で気難しい夏目金之助(長谷川博己)は、留学先のロンドンで神経衰弱に陥り、帰国後も被害妄想は収まらない。子供を抱え、家計の苦労を訴える妻鏡子(尾野真千子)に「何と無神経な女だ」とどなり散らす。池端は鏡子の「悪妻説」を退け、「小説のことしか考えない」ように映る夫と、家族を守ろうと奮闘する妻との価値観の違い、葛藤をたくまざるユーモアを交えて浮き彫りにした。